

統一

○本 號 要 目

(昭和三十年二月廿四日第三種郵便物認可 毎月一冊十五頁發行)
 (昭和五年十月十五日發行 統一第一號九十頁)

日蓮上人の冷靜……………松尾忍水

神社と眞宗教……………同

佛教統一の聖業……………窪田孤松

佛教上の評論を試じ……………石波江東

論 評 一 束……………清瀬華城

予の所謂宗教文學を鼓吹する所以……………松尾忍水

轉 迷 悔 語……………今成乾隨

斷 腸 爰……………原田容廣

懺 悔 錄……………太田伊代平

教用三日の旅……………山根青村

老 翁 記……………林日

是 風 雨……………孤松

轉 便 登 録……………は

懸 雲 兄 に 酬 詩……………同

遊 習 會 日 誌……………同

雜 園 詠 草……………津大賢

布田王寺本尊勸請式改善圖末……………上

五眼勸信談……………小林日

漢詩韻文俳句等……………至



の、曰く颯風の如き彼れ、曰く宗教家に非ずして寧ろ彼は政治家也、曰く兵に將たるべき失意者、曰く謀反人、曰く大奸雄、曰く大聖人、曰く量り難き大なる怪物、曰く佛教界の擾亂者、曰く佛教統一の先登者、曰く何、曰く何、其云ふところを把り來らば殆ど數ふ可らず、然れども其觀察する處は善惡共に上人の多くは一面の元氣充實若くは霸氣突發の方面に過ぎず、爲に日蓮上人の面目は益々世人より誤解を招かんとす嘆すべし哉、惟ふに日蓮上人は大山の如く其容姿を仰ぎ看るも其全軀を一目に見定むる能はざる如き也、されば人の種々に之を眺むるも詳見にあらずんば即一面のみ、殊に上人の熱誠方面は誰人と雖容易に見得べきものたるを以て、學者殆ど之に集中す、爲に其一面のみは非常、唱道せらるゝを以てそれが稱揚は却て上人をして唯單に狂熱の一怪漢と迄見做すものさへあり、是れ上人の爲め此千古の偉人の爲め最も憾むべき事と云ふべし、予輩は曾てより日蓮上人は古今絶倫の大偉人、前後終無の大巨僧と信するを以て、冀ば其幾多の方面の美德を發揚し而してそれが唱道したる正義の隨て世間多衆より了解を早め、一人も速に正道に入るべく祈るものにして是が爲には最も赤誠を有するの一人なるが故に、既に數年前は其優美及慈悲の方面を説かんとして『臺日蓮の文學』と題し兩三回はを辨したるとありたりき、而して今又『日蓮上人の冷靜』と云ふは畢竟世人の末だ氣附ざる點に於て、予輩は其美德の一分を稱揚せんとする熱誠の微志に他ならず、實はあまりに世人が上人の霸氣勇氣をのみ説くを以て、遂に狂熱の日蓮と化すを不快に思

ふものから茲に正反對の冷靜の二字を對用す、蓋し彼の文字に配合せしめしものにして寧ろ『日蓮上人の深慮』若くは『考量』と命せし方至當なりしやも知る可らず、何は兎もあれ予のかよわき筆路は學者の爲に讀まるべくうら耻づかしき心知す、願ふ處は予の意を汲まるべき人のあらんと而已

上

筆致雄健にして元氣充ち、一氣呵成にして英氣溢れ、其れが威風相貌を偲ばしむる者は實に日蓮上人の遺書なりとす、上人一世幾百數十卷の遺文消息文は、其文藻殊更に飾るなしと雖も上人當代の大氣慨、讀み來り讀み去るの間に於ておのづから道中鏗々の聲を起し、文字躍動の思を生ずる也、されば之等遺者に接したるものは皆上人の熱誠を知り、勇氣を知り、猛烈を知る、それと同時に余りに熱血猛烈の爲に、智力を眩き、考慮を眩き、遂に以て狂熱に失し常道に逸せしものならずやと爲せり、然れども泰山の如く大海の如き上人は何ぞ熱血に狂ふ處あらんや、只世人豆大の頭腦と膽とがあまりに小なるが爲に、日蓮一面の一滴に過ぎざる熱血も、實に瀧の如き音響を以て耳朶を襲ふものに過ぎずして、上人の爲には如斯も未だ遙に小なるもの也、釋尊は衆生の血を吐て死せんことを慮りて極達の地獄を説かざりしと云ふ、更に日蓮の熱誠の本相眞面目は今日學者輩の窺ふ可らざるものに屬す、然れ共上人一滴の熱誠尙ほ人をして其偉大なるに驚かしむ、嗚呼上人は如何神の量ぢよ。

去ればなり上人の遺文に接し遺書を繕くもの皆其熱誠の殷大なるに打たるゝなり、洞底の長松、閨中の錦繡

共に未だ見る能はざる彼等は、良匠の器にあらざるとともに火を點するの暇を得るとなくして、遂に熱血的方面の日蓮をのみ観るを得て満足するに至れる也。今予は人の熱血方面以外を見るに至難なるがため上人を以て狂熱に走せ常道を逸したらずやとするに對し、少しく其の正反對たる上人の冷靜の真相を探らんとす、今上人の冷靜を映寫せんとするに當つて其れが冷靜の意義を記し置くの必要あるあれ

世人の冷靜は全くの冷たきなり、开は恰も氷の如くにして無情也、世人の靜なるは全くの靜なるなり石の如くにして死せる也、日蓮上人のは然らず、世人の熱血は全くの熱血也狂人の如くにして無分別也、世人の熱血は全くの熱血也舵なき舟の如く岩に碎けて止まんのみ、日蓮上人のは然らず、

日蓮の冷靜は北極の空の如く冷にして平かなるとは亦八海原の波の如く靜なり、されど全く熱血と至誠と信念とを除き去る能はざる也、上人の冷靜は必ず一分の熱情と思考とを含有す、彼の冷靜はより冷靜なるだけ底の底に、一團の堅き熱の結晶を認め得る也、彼の冷靜の度一度降りて平かなるの時には一段と未來に於て恐るべき大熱血の火の手が胸底に潜めるところを知るべし、彼の冷靜の更に甚しきは其次に於て最も恐ろしき熱の發動を意味す、然れども小なる世人には彼れ日蓮の冷靜を觀る能はず、彼の冷靜は遂に多く世人の注意を引く事なく終れり、寧ろ彼の冷靜は總て熱血の如く見做されたり。

而して彼日蓮の熱血は烈火の熾然として天を焦すが如く然り、されど其熱の盛なるだけけりだけ考量を生ず、深慮を生ず、否冷靜と云ひ得べくば即其冷靜を生ず、今上人の遺文を引きて之を證せん

上人一代の法難中其最大なるものは名も恐ろしき龍口斷頭場程の光景也、而してそれが前後の實況を寫し出せる消息あり、开は自筆になれる種々御振舞御書一通是也、即一氣呵成の筆雄健なる筆、實に御振舞御書は上人一代の慘憺たる景況中、殊に上人が貴重の一命はあはれ三尺の秋水に草葉の露のうれにまして、随くも落去らんとせし大悲惨、龍口の法難の前後に於ける状況を序したるの文にして、この書は實に此法難に於ける麗はしき景物也、咲き散れたる雨中の花也、人一度此書を繕かは其疾風の如き筆勢と、正理に叫べる義の聲と慘憺たる事實の反響と、奪ふ可らざる彼の條理と確信と、而て裡面に隠伏せる幾多の活法門とは讀むものをして言ふ可らざる一種の深き感慨にうたるとべく、當年の追回轉た措く能はざるものあり、されば此書の如き書に一の冷靜を認め得べからざるのみならず、文々句々、一字一章、殆ど熱ならざるなく血ならざるなきが如し、故に人多くは此書を以て上人の熱血の最も揚れるものとせり、されどされど其裡に考量あり深慮あり即ち冷靜あり、吾曹は今や此熱血揚れると爲せる此書を以て評せん、然らんには他の遺書に至つては一讀の下直に彼の熱血を認むると同時に亦深き彼の考量あり深慮あり而して冷靜なりしを知り得べければ也。(未完)

神社と眞宗教

(宗教は我國の神社に對して如何なる處置に出づべきかは一問題也)

忍 水

我國に神社なるものあり、這は宗教分類中に屬するものなる耶、次に其崇拜の儀式は宗教の本義と衝突する

處なき耶との二ツは己に我國民間に於ける問題なりとす、今この問題を解決するに當つて先づ神社なるものの性質を述べざる可らざる也。始め皇祖天神の天孫を召し神器を授けて曰く「葦原の瑞穗の國は吾子孫王たる可べきの地なり汝皇孫宜しく就て治む可し且此鏡を見ること吾を見るか如く殿を共にし床を同ふす可し寶祚の隆なる天壤と窮なかる可し」以來子孫この意を昧して怨らず、三種の神器を奉安して以て基國の根本となす、神武天皇海内を平鎮し都を橿原に定めて人皇の祖となり給ふや、靈時を鳥見山に建て皇祖天神を祭る之を國祭神の始にして續て國家皇室に功勞ありしものを祭るに至り多くの神社を置さし所以也。故に我國の神社は、皇祖玄宗に對する奉祀の「齋場」なり、國家に功勞、皇室に忠節なりしものを祭るの「清壇」なり、換言すれば宗教の先祖父母の靈に回向するが如く、猶近き例を以て之を言はば世人が長者貴官に對して敬禮を捧ぐるが如きに似たるもの、至極單純潔白なる崇敬の對象にして、彼の金屬の像を建設して其徳を表彰するものに、更に至誠尊嚴の崇敬が加はりしものと見て大差なからん也。宗教の三寶に歸命するもの、若くは本尊に祈禱するものとは全然性質を異にせるものと謂ふべし。

夫れ然り神社は宗教分類中に屬すべきものに非るは勿論也。然るに中古より宗教的の儀式を加へ、其神社をして衆人所禱の對象となさしむるものあり、近來に至つて其最甚しきに達せり、惟ふに是れ無學なる神官、我利に驅き神司等が神社起興の本源を忘亂して猥に荒妄の言を唱へ遂に斯の如きに臻らしめしものと謂ふべし。

しかれば則神社は根本の旨義に因り、祈禱觀念を與ふべき宗教的儀式を絶廢して之を祭らば單純清潔なるものにして、宗教と何等衝突する處あらざるは勿論、宗教は皇室の祖宗を重ずる上に於て、國家の功臣を顯彰する上に於て、之を保護するのみならず、吾曹祖先たるべき功勞者の靈を雷に一家の私祭となさずして、廣く國民一般の公祭とすることを祝ふもの也、如斯は今人は其れに向つて奉公の赤心を捧ぐることに當り、又將來民心に與ふる處の利益は義勇公共の志を増植獎勵するものなり、豈益なしとせんや、况や敬神は我國是の華なるに於てをや。(但し敬神の敬を誤り讀むなからんとを注意す)。

如上の如く神社と宗教の區別、神社の儀式と宗教の本義と絶へて衝突なきことを述べしと雖、這は決して一般の宗教に對して言ふ得べきものに非ざる也、教義根底の確固たる眞宗教にして始めて斯の斷案を與ふべきものと云ふべし。(完)

佛教統一の聖業

孤 松 窪 田 純 榮

事業は強大なる力によつて成効するものにあらず。全たく堅忍と熱心との二者相待て。成功の結果を産むものなりとす。夙に吾人が滿腔の熱血を注ぎて大呼疾聲し。心力を傾けて天下に號令せる、所謂佛教統一の大聖業は。佛滅後已來の大活案にして、聖祖日蓮の我國に降誕を示さるゝありて創めて斯の聖業を開基せら

る。而して烏兔匆々干茲六百有餘年。幾多先師の身命を賭して。斯の遺業を相繼せられたるにより。今や吾人の手に移りて此聖業に盡瘁すべきは。聖祖日蓮の末流に浴せるもの、勉むべき第一義諦たるは。敢て言論を待ざる處なりとす。固より斯の遺業を果さんとするに當つては。胸裡一點の私心を捨てざるは勿論。大恩教主釋迦牟尼世尊の教勅を奉體し。聖祖日蓮の芳範を軌範として。同心戮力水魚の想ひを爲して。統一の聖業に資する處あらんこと。則ち聖祖門下八教團の末弟等が。雙肩に擔へる任務にして。何人も此言議に對して異論を唱ると。許さざるにあらず能はざるなり。之に依て吾人は正々堂々として。折伏の歩調を進めんか爲に微力を揮ふて統一を呼號する所以なり。

吾人は嘗て之を聞けり。輪王の號令は唯西域に止されり。帝釋の號令は三十三天に限れり。梵王の號令は上を統べ下に冠らしむと。而して吾人の絶世しつゝある。佛教統一の號令は。豈に三世に互り横に十方に遍滿せる。大法王の勅宜を受けて下せる大號令なり。豈梵王帝釋の比にあらんや。然るに此大號令に服従せざるものあらん歟。直ちに妙法の利劍を採り彼が頭に加へて。三軍に示さずんばあるべからず。併しなから幸ひにして軍紀の振肅し。歩調の整々たるものあるは。他日凱歌を奏するの時を豫測するに。蓋し難からざるを信するなり。

然りと雖も魔賊惡敵の堅壁を守り。其勢ひ侮るべからざるものありて。佛教統一の旗下に彼等の降伏するの日は。實に猶前途遼遠なるもの、如し。故に吾人は聖祖日蓮の軍令を奉戴して。統一の軍旗と益々進めんと欲す。其聖祖の吾人に下されたる軍令に云く。

法王の宣旨背き難ければ。經文に任せて權實二教の軍を起し。忍辱の鐘を著て妙教の劍を提げ。一部八卷の肝の妙法五字の箴を指上げ。未顯其實の弓をばり正直捨權の箭をばけて。大白牛車に打乘て權門をかつばと破り。かしこへおしかけ。こゝへおしよせ。終に權教權門の輩らと一人もなく責落して。法王の家人となし。天下萬民諸乘一佛乘となつて。妙法獨り繁昌せん時萬民一同に。南無妙法蓮華經と唱ふる時を御覽せよ。(如説修行抄)

吾人の謹みて奉體遵守し。一彈指の間も忘るべからざるは。則ち此聖旨にして之と同時に。「何に強敵重なるも努々退く心なく。恐るゝ心なかれ。縦ひ頭をは絡を以て引切り。どうをばひしほこを以てつゝさ。足にはほだしを打てさりを以てもむじも。命のかよはんほどは。南無妙法蓮華經」と。是則ち吾人が法戰に臨むの大覺悟を。垂訓せられたるを知るべし。

此大覺悟此大決神あつて始めて。大法王の家人たるべく。嚴護法城の勇士たるを得べきなり。而して聖祖日蓮其魁せられたり。「若黨其二陣三陣つゝいて。迦葉阿難にも勝れ天台傳教にも越よかし」の。祖訓の如く吾人は滿身の勇力を振ひて。佛教統一の聖業に貢獻せざんばあるべからず。「各我弟子と名乗らん人人は。一人もをくし思はるべからず。親を思ひ妻子を思ひ所領を顧みることなかれ」とは。則ち聖祖の吾人に示されたる嚴訓なるを知れ。

然り而して佛教統一と謂へることは、吾人の懐抱せる理想に過すして、終し億萬劫を歴るも此理想をして、現實ならしむること難しと。或人は此の如く語れるあり。否聖祖の餘光に身を温むるものにして、實に斯の如く信する獨虫あるを知る。固より此徒は吾人の齒牙にかけけるに足らざるも、佛海の逆路即那陀決して寛容すべきにあらず。本佛の愛子聖祖の末弟たる吾人にして、然く薄弱怯懦なる思想を懷き、如何してか統一の大願を完ふし得らるべし。

則ち佛教統一の聖業は、自己の智分より出たる立案にあらずして、全たく本佛の内證より發現し來れる。一呼百諾の聖案なるを誦らざるべからず。少しく糺述を試みん歟。法華の序分無量義經に於て、教主釋迦牟尼佛は實に左の如くに宣勅せられたり。

善男子。有_レ二法門_一。能_レ令_レ菩薩_一。疾_レ得_レ成_レ阿耨多羅三藐三菩提_一。若有_レ菩薩_一。學_レ是_レ法門_一者。則能_レ得_レ阿耨多羅三藐三菩提_一。世尊。此法門_一者。號_レ字_レ何等_一。其義如何。佛言。善男子。是一_レ法門_一者。爲_レ無量義_一。(中略)。衆生_一性欲無量_一。故_レ說法無量_一。說法無量_一。故_レ義亦無量_一。無量義_一者。從_レ一

法_一生_レ文。(說法品)

斯の如く無量義の法門は一法より生じ、一法に無量義の結歸することば、佛陀の金言斯かに之を説く。則ち從一出多從多歸一の法門と謂へるは、此教理の由縁の謂ひにして、教祖釋迦牟尼の下されたる。佛教統一の聖斷なりとす。吾人は此の聖斷を奉戴し依據として、統一を絶叫して止ざるなり。則ち一法より無量の義

を生せば、無量の義は一法に歸趣せざるべからず。吾人の所謂統一なる意義は、此佛意を表白せる名詞にして、假使日月は地に墜ち大地の覆へることありとも、一法より出たる無量義は、必らず一法に歸結せられずんば、佛陀の金言は虛妄に屬するのみならず、宇宙の一大真理は敗滅し終らんのみ。如何してかざる事のあるべき。而して無量義を出したる一法とは、抑も如何なる法ぞ。妙法蓮華經にあらずして何ぞ。之を法華經に來て顯説して云く。

未來世_一諸佛_一。雖_レ說_レ百千億_一。無數_一諸_レ法門_一。其_レ實_一爲_レ一_一乘_一。我等_一亦皆得_レ最妙第一_一法_一。爲_レ諸_一衆生_一類_一。分別_レ說_レ三乘_一。

此他引證し來らば收擧するに迫らざるも、如所說者皆是眞實と讚歎し、諸經中王最爲第一と顯説せるもの。皆之れ法華の最勝なることを、證明するにあらずして何ぞ。豈寸毫の疑を容るの餘地あらんや。

然るに世の學佛の徒は皆教相に迷ひ、其膠執を株守して動かす。小を以て大を打ち權を以て實を謗じ、揚々得意の色あるは、實に吾人の悲愍に堪へざる處なり。之に依て折伏の法鼓を鳴らして、彼等權教權門の堅陣を破碎し、悉く法王の軍門に降らしめ、吾人が理想せる佛教統一の聖業を現實せしめて

天下萬民諸乘一佛乘となつて、妙法獨り繁昌せん時萬民一同に、南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹風杖をならさず。雨壤を碎かず。代は義農の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ、長生の術を得。入法共に不老不死の理。顯はれん時を御覽せよ。現世安穩の證文不可_レ有_レ疑者也。(如說修行抄)

斯かる本國土を現顯せしめんと欲して。吾人が天下に號令せる佛教統一の聖業なりとす。併しなから時は闘争堅固。白法隱没の機運に際す。吾人と共に聖祖門下の徒は。法華折伏の行軌を格守して。「吾々惜まざる諸經は無得道墮地獄の根源。法華獨り成佛の法なりと呼はりて。諸宗の入法共に之を折伏し」。大日本國乃至一閩浮堤に弘まれる。統ての宗教を粉碎し結束して。三大秘法の妙法に綜合し統一し。一天四海皆歸妙法の實を擧げ。自他彼此共に現當の勝益を享受して。自受法樂の快境に至らんことを期せんと欲し。茲に十年一日の如く佛教統一の聖業に従事し。非常なる熱誠と堅忍とを把持して怠らず。ますます奮勵して止ざる所以は聊か護法の丹神を抽んずるに外ならず。

而して今や時機の來りてか。佛祖の冥助を賜ふによりてか。佛教統一の先序として。日蓮門下各教團の一大統一の。將に成らんとせる動機は現はれぬ。吾人は一日も速かに此結果の。圓滿成熟せんことを懇請して止ざるなり。斯の如くにして其端緒は開かれ。此大勢力を集中して權教權門に當らば。一陣の疾風萬木の枯葉を掃ふに異ならず。彼等魔賊の一類は旗を捲き甲を脱して。大法王の軍門に來り降らんこと。蓋し遠きにあらざるを知るべし。

然りと雖「敵は多勢也。法王の一人は無勢也。至_レ今_ニ軍やむ事なし。法華折伏破權門理の金言なれば。終に權教權門の輩を。一人もなく責落して。法王の家人となさん」(如說修行抄)吾人が佛教統一の主義を抱持する所以は。實に此大志願大希望を成功せんと欲するにあるのみ。請ふ護法愛國の志士は。大に吾人と提携して此聖業を翼賛せよ。佛教統一は吾人の事業にあらず。則ち教祖釋迦牟尼世尊の聖業なることを知らば。誰か贊同に躊躇するものあらんや。謹みて合掌唱題し筆を机上に投す焉。(完)

各面評論



○評策一論

怠慢病にかゝれる人よ

清瀬華城

余が知友なる大學出身の某判官を、其宅に訪ふ、壁間

掲るところの大幅の書あり、則ち其文に曰く、

待有餘而後濟人必無濟人之日

待有暇而後讀書必無讀書之時

五龍老人玉乃世履書

と、何たる至實なる言ぞ。恰も老實なる師父が、我側

に在りて、功々偲々、怠慢なからむことを注意せらるゝの感あり、觀者、誰か動かざる者あらんや、宜なる哉、知友某判官の、精勤用意乃至れるものある、偶然にあらざるなり、

世の人多くは謂ふ

餘力を貯へて而る後、爲す所あらむと謂ひ、餘力ある者は、閑日なく暇時なしと、今暫く其時を待て大に爲す所あるべしなど、唯、言のみ大にし、聲のみ高くして終世の爲すところなくして、了るもの幾許ぞ、

世の怠慢病にかゝれる人よ、

志節あるが如くにして之れなきの人よ、

爲す所あるが如くにして其實なきの人よ、

能くこの警語を觀て兩腋彼の汗なきを得るや否や、特

に世の佛教家は如何の感をか爲す、

又特に又更に、日蓮聖祖の門下生は、彼の嚴乎たる、

照然たる、富木氏へ賜へたる、聖語を知らずや、其文
(録内)に曰く

我門家は夜は眠を斷ち、晝は暇を止めて之を按せ
よ、一生空く過して、萬歳悔ること勿れ、

と何たる禁切にして、深刻なる聖語なるぞ、我門下生
たるもの、能く眼を明けて之れを讀み得るもの、能く
見得るもの、幾許かある、借問す、

唯、慙死、
唯、愧死、

するを得ざる者の外、其餘地を有せる者幾許かあるや
と、

橋慢の心を空くせよ

橋慢心の言ある素より論なし、故に佛陀は特に、離橋
慢行を以て説かる、橋慢性なるものは先天的に有せる
者多しと雖も、多くは得意の時代に表はるものなり、

見よ橋慢心に充填せられたるときの人を、
如何なる忠言も、
如何なる心切も、

よく耳に聴き、よく意に容るゝもの、絶へてあらざる
なり、

慢心に騙れたる人にして、其事を仕遂げ其終りを全ふ
せし者は、未だ骨て之れあらざるなり、

慢心は、彼の細心用意の、こゝろと背馳するものなり

慢心は、彼の交誼を、なみするの具なり、

慢心は、彼の衆望を、滅する適當の機關なり、

慢心は、彼の正義公道を求るに迂にして、我見私行を
爲すに敏なるものなり、
慢心は、彼の進歩てふものには敵物にして腐敗と情弱
とには味方なり、
慢心は反省なるものとは縁、遠くして自滅とは親類な

然れども、其多くは

失意の時代

古人杜牧之曰く
嗚呼滅六國者、六國也、非秦也、族秦者秦也、非天下
也、(中略)後人哀之而不鑑之、亦使後人而復哀後人
也。

と、古人の俗士杜牧之すら既に之を云ふ、况や其身、
宗教家を以て任するもの、豈猛省するどころなくして
可ならんや、

嫉妬の心を離れよ

嫉妬の惡徳たる今更論なし、論なき程なるが故に之れ
世に少き善なるに、事實は然らず、故に佛陀は離嫉妬
行を以て説かる、元來、嫉妬のことたる、女性的のも
のにして、又小人俗物に多し、悲夫、今やこの惡徳は
小俗の輩にのみ往來せず、熾然として、宗教家の境域
にも侵入し來れり、これも先天的に屬するもの多きも

に表はるゝものなり、見よ、彼の嫉妬の性なるものは
女性的、無能的、敗劣的、醜惡的、孤疑的、性分を合
有せるものなり、故に人間一度、失意の穴に陥ゆるの
場合あらむか、一も正當の觀察を爲し得ずしてアテは
づれの考を爲すものなり人の、一擊、一笑にも、クタラ
ヌ考を爲して以て立波ナ、觀察を爲し遂げたるかの様
に、思ひ、間又、離間的に、獸法螺を吹き散す者の片言
を耳にして、判するに彼のアテはづれの考を以てす、
正鵠を失せざらんと欲するも、豈得へげや彼の嫉妬の
怖るべきは、暗に人の賢を賢として尊ひ、義を義とし
て、守るべきの道を破却するのみならず、
自己の天眞、
自己の力量、

等、凡へての自己と云ふ者を、察知するの明を盡失し

去るものなり、之れを思へ、已れに省みて直くんば、千萬人ありと雖も、我往かむ、てふ、男兒の意氣なくんば、あらず、況や教家の本領を擔ひ居る人間に於てをや、この嫉妬は、上に掲るところの諸の惡徳を有して自他を過たしむ、之れを省よ、

嫉妬は暗に、致者失意の地位にある人間のみならず、稟性に於て、既にこの惡徳に長して熄むべからざるの人あり、かゝる人間は、外形に於て、いかに、男らしさを整ふも、

優士勇者を氣取るも、
丈夫磊落の風を飾るも、

其内情弱點の、よくわかり居る者よりして、之れを見れば、噴飯に堪へざるもの多し、

嫉妬の性に長せる者よ、更に善き道、正しき義に依り

て、一層の勇氣を鼓舞して進め、彼の西人の哲者は云はすや、

虎に勝つ者は勇者なり、
敵に勝つ者は更に勇者なり、

巴に克つ者は更に最も大勇なり、

と、何んぞ其克已と戦ふの價値ある。斯の如く夫れ大なるや、進め、進め、更に進んで、

眞勇を養ひ來れ、
眞の志士義人たれ、

然則、嫉妬の念は忽ち遁走せむ、
惡徳の凡へては頓、隻影を留めざるに至らんなり、

慈悲行を爲すには
智慧行を加へよ

人世の生存上、欠くべからざるものは、慈悲と智慧との並行是なりとす、慈悲を施爲するものは、物質的施爲

と、理性的施爲とを問はず、能者教者の地位に在る者

なり、優者富者の側にあるものなり、彼の慈悲を受くる者の位地にある者は、常に何によらず、自己の需めんと欲するもの、自己の受けんと欲するものは、其供給を彼の、能士教者に向て、雷むるが其常なり、若し性質を擇ばずして、其求るがまゝに、慈悲を施爲せば

この慈悲は却て仇となり、これ其他身を陥擠するの施爲となるべし、これ其慈悲と智慧との、並行を要する

所以なり、智慧は辨別力を持てり、善惡を知り、大小と輕重とを知れり、經道と權道との別を知れり、若し

夫れ、善惡、大小、輕重の辨別もなく、慈悲行なるの故を以て、悉く之れを施爲するものとせば、其施爲は

則ち、施爲の効力を失して、正反對の結果を呈せすんばあらず、

世人一般の上に於ても猶且然り、况や、

聖祖の門下生に於てや、聖祖の訓示に曰く、
日蓮が弟子と名乗るども日蓮が判を持たざらんものは御用へあるべからず、

と、何ぞ其明快にして、根本的なる

日蓮が判とは何ぞや、根本的智恵行を經來れる、正義妙道是なり、佛陀の慈悲は、常に智恵の軌道を通して

來れり、茲を以て其慈悲也、其悲也、百發百中、一も過誤あらざるなり、凡人の慈悲は、たゞく施爲すると

ころありと雖も、智慧行に欠くるが故に、却て過誤に出るもの多し、佛陀の修智恵行を説き、養慈悲行を示

せるもの、良に所以なくんばあらざるなり、若し夫れ、慈悲を施爲するに、智恵行を加ふることを得

ずんば、若かず佛陀の事智恵、圓滿の訓誨を遵奉せむには、

嗚、其根本を鑽仰し來れ、

文學 短評

文學とは、人間思想の表題して、美的に疊重し、叙列せしもの、謂ひなるべし、去れば苟も文學と名くる程のものには、少くとも、暗に思想の符調として外に排列せる上に名けずして、夫れを讀下せば不知不識の間人をして其趣味を掬し、讀むことを倦ざらしむ底の、美的巧妙の文字を、綴列せしものを、好文學と名くるの至當なるを覺ゆるなり、

去れば、宗教文學と云へば、唯宗教に關する事柄を叙記せしものを指して云はす、宗教の内包に存蓄せる、多くの趣味ある意義及び其外延に見ゆる所の宗教的行動を巧妙に之れを表題し以て、其讀者をして不知不識の間、宗教的感化を、受得せしむる底の、大感化力を保有せしものを、眞の宗教文學と稱ふるを得べしと信するなり、

去れば文學には、特種の性質を持てるものにて、國別なるの故を以て、文學の趣味も異同あり、則ち印度文學、支那文學、大陸文學、など種々ありて、或は主觀的から、其特長を發揮せるものもあり、又客觀的より進歩せしものもあり、我日本のみにても、澤山文學の異同を生じて、互に相優劣あり、主義別より生したる文學、時代別より異同を生せし文學、

風色を根據として生せし文學、風色文學とは、彼の富士山文學と云ひ、琵琶湖文學など云ふ類のものを云ふ、詳しくは別に又文學論とも云ふなる、項を起す時に譲りて、今茲には、短評として近來の文學發達に連れて喜びにひき替、又雜紳的に文學の濫發に還ひて、各其特長を發揮するの道に、故障を生せしを慨するの言を

漏らすものなり、

宗教文學と云へば、其範圍廣し、されど、余は先師日蓮が、云爲せられたる夫れが、管に自然に文學の特長を有せりしのみならず、凡へて宗教的言動は、斯くあらねばならぬてふことを信するが故に、殊に日蓮文學を推して、之を鑽仰し、之を鼓吹し以て、之れが發揮に努めざるべからずと思ふものなり、

佛教上の評論を試む

石 渡 江 東

富士の山おなじ姿に見ゆるかなあなな面もこなたおもても

とハ衛門督僧都の能く富士を見たる處であります
狂体としては蜀山人が

た富士さん霞のころもぬがしやんせ

雪のはだへが見たふござんす

戯れて富士を能くしやれに見た中、最も感心適表するは佐藤一斎翁の筑波山頂から諸方瞰下して其一語能く富士を見るに實を穿ちて吾人と同感なるものあり今翁の筑波山の記板葎(省前略後)して御咄申せば、遠則高原日光秩父諸山聯延綿亘高低起伏而不二山樹巍々然坐於坤位(日録曰花徑於佛教亦然)大山箱根如趨聽使令者當不二之麓見一泓如盆池則浦賀内洋也加納山鑿山亦如塔壁蟻垤而外洋一白曳練屨房總諸山頂東趨達於注子水戸其間殘山剩水重抹輕掃烟雲縹渺圓碧點綴可謂關左八大州一幅沾全圖也哉

今此の人々は随分喜んで能く富士を見たんである未だ見ぬ人でも富士の咄は喜んで聞きたかる位じや山嶽でも不二となれば最早山の王じや如何なる山ても日本では富士の靈に如く者はあるますまい山は只峻秀高聳なるばかりが山の妙所でなく山の妙は

略望絶住壯宏のみが山の妙ではない見ぬ人までか不二の断と云へは喜んで聞く所が山の徳である
 今佛法に於ても其通り諸方面から見ても固然する事の出来ぬ處が佛法の妙處である實が顯れなければ佛法の妙と呼ぶ事はないのである

或は寂靜主義或は厭世主義を鼓吹するもあり或は假實空の三方面より觀察し空理を以て最上至極の真理となし或は八不中觀を標準として消極的に通情門に依り専ら空説を主張して徒に理論を喜ぶものあり

佛教中若し法花經なきか真面目に根底より考察し來らば或は荒唐無稽の怪談異説に過ぎないと云ふ評論も又免れざるの止むを得ぬ事に立至るも敢て怪しからぬことである

法花經は抽象せる理論や又思辨的批判以上に超然として一念三千の珠を懷き所謂法界の大我と云ふ大本能を

有せる結果として銳意一番彼の佛教中に巖然崛起説異議を唱へ大に世界の人目を眩惑せしめる所の似非的教理は飽まで排斥すべき權能を有せるものである
 今一二の例を擧げて申せば法花には事密を説ざるが故に尙は大日經には及ばすと云ふ如き又
 爾前の諸經に説くことを法花に説かざる事往々あるか故に是も亦法花尙不及と云ふか如きは誠に感笑の至りに許へぬことじや

孝經論語に天文地理を説かざるか故に孔子は地理も天文も知らぬ誠に無學の男じやと云ふ幼稚の議論であり

荆溪曰法花已前諸經所明方便教門並是圓門綱目而已雖諸部中有權有實而並不明權實本迹被物之意故非大綱故説法花唯存大綱不事綱目と判して餘經の如く一機一緣の説法にあらざる所が却て法花の手柄即ち吾人が極意

妙味として喜ぶ所なり何を苦んてか事密のみを云はん

又天台明臺妙日法花不爾佛平等説如一味爾正直捨方便但説無上道純是一詮又云昔毀皆聲聞而佛實以大乘教化又云汝等所行是菩薩道此則融攝合妙如此兩意異於衆經是故言妙譬如良醫能變毒爲藥二乘根敗不能反復名之爲毒今經得記即是變毒爲藥故論云餘經非秘密法花爲秘密也

無相を劣とし有相を勝となす等は全く教佛の大本義を誤て居る有相を勝として世間と有爲とのみに執して無相の深理を廢棄するは有無の關係世間の理法を解せざるからである一心の妙体四悉の妙用を知らんからで天台の理法花眼から見ても彼れが本據とする所の阿字本不生は即ち全く我れの一心中三諦の理であると云ふに違ひない況んや彼れの祖師とする一行の義釋には明晰に今此本地之身又是妙法蓮花最深秘密處云々と判しける

今此本地之身又是妙法蓮花最深秘密處云々と判しける

みなならず一行は親く章安大師に従て法花を學び又無畏は法花三昧を證して妙法蓮花を稱揚せるにあらざるや

是等皆一方面の偏見より起る所の曲見ならん
 或は又可説不可説の誤謬より一宗を建立するものありて取るに足らぬ曲解の甚しき者じや假りに一二句を擧示せん

大經曰有因緣故亦可得説云々
 法花經に曰無數方便種々因緣衆生説又曰以方便力故爲五比丘若通若別皆可得説

大經に曰有眼者爲盲人説乳此指真諦可説
 天王般若に曰惣持無文字文字顯惣持此指俗諦可説又如来常に依二諦説法

法花曰去來坐立常宜妙法如注大雨大經云空中雲雷生象牙上華何時一向無説乃至離説無離離無説
 月重山に隱ぬれば鼻扇して之に類し風大虛に息ぬれば

樹を動して之を調ゆるか如く今の人意鏡にして支覽則
 難し眼は色に依て入る文を假て即易し此の如き御教訓
 あるにも拘はらず不立文字教外別傳抔云はれぬ位の事
 は三歳の童兒も了解出来るから別に批評を試むるの價
 値がないよふじや

斯る支離滅裂予盾撞着一小方面に執して假定架空説の
 みに一方向より實と見一方向よりは權と見一方向より
 は難と見一方向よりは易と見る様では未だ佛教の全体
 真相とは許せぬ不二の山を各方面より見てもをなほ姿
 である處が靈妙じや

法花經の靈妙なるや恰ど日本の富士と同じで比類のな
 き靈妙があるからして已今當超過と御説き被遊てある
 ぢや爾前の諸經に依て立てたる各宗は平地から富士
 山頂が見る様で目が届かないからして法花の二十の大
 事六難九易二乗作佛久遠實成先天的佛教の大本義は夢

だも見ざる所にして彼れ彼れの佛教の假面は今に統一
 の風に吹き込れて仕舞ふ處の小善根小功德である

昔一國の政事を扱ふ子産と云ふ人が或る河に橋を架け
 た孟子が笑て居る一橋を架けて僅か一ヶ所の河を渡す
 も仁術には違ひないけれども子産の仕事としては餘り
 感心せぬ夫れは着眼點が違て居るからである

孟子が笑た筈じや成る程一國の政事を程能く扱へば全
 國中に橋の一つや二つ位いでない總ての方面に居なが
 ら行届き圓滿なる政事家と云はれるに未だ痛痒すへき
 事柄の大急務が澤山あるにも拘はらず一橋を架して甘
 する位では子産も子産なる哉と笑たらしい
 佛教も大宗教の佛教としては彼れ彼れは未だ局見を免
 まいと思ふ

(未完)



宗教文學

予の所謂宗教文學を鼓吹する所以

忍 水

其 一

吾曹は今日の文學に於て或る趣味を得たることを感謝
 す、然れども今日謂ふ所の文學を以て眞文學と認むる
 能はず、吾曹は今日の文學が頗る勃興の旺盛時代なる
 とを知る、然れども悉く之を悦ぶべきものに非ざると
 を斷言す、今日の文學は道義と背馳せる文學也、小趣

味を喜ぶの文學也、人心を誤りつゝあるの文學也、大
 なる興趣味を隠蔽せるの文學也、开は亦何が故ぞや、
 今日文學は文學者自己が刹那の間にも感應すべき美
 を稱ふ也、彼は小なれども純白也、潔白也と云ふ也、蓮
 の如く、星の如く、揺らめく百合のその如く愛でた
 しと云ふ也、彼等は美は高く、別に歩むべき路あつ
 て道徳などの容喙すべきものならずとせり、善道は
 廣けれども俗臭なり美道は細けれども麗はしと云へ
 り、彼は盛に戀をいふ也、その戀は野合の如き鄙しき
 ものにあらずして清淨潔白なりと云ふ也、彼は愛を云
 ふ也、愛の發動は暖き接吻となり握手となる也、彼は
 心中に、自殺に美を認むるなり、彼はよく泣也よく熱
 する也、彼は裸體美を愛する也、彼等各自美の主張は
 今此に盡す能はざれども开は凡そ大同小異也、異なる
 が如くにして其本は一なる也、

今日の文學者は善を學ばずして先づ美を學ぶ也。倫道を知らずして單に美を以て人を化せんを試むるもの也。而して彼等の其美てふものは事に一理を存するが如く、確に一の美を發見せるには相違なしと雖、それ等は善と并行せず、大道を顧はず、正しき戀は清きものと悟らざる也。而してそれ等の余りにさゝやかにして偏狹なりと云ふは、只美は星や華やにのみ住せるかのやうに思ひ、振り反つて大局の美を觀んとは爲さず、究極して美は善道と同步すべきものならずと爲し、道義と調和すべきものならずと爲し、爲に彼等は大道を輕蔑し倫道を無視するに至る、されば彼等は敢て耻ぢなしと爲せるも其性行の墮落途に止むを得ざるに至り、彼等が不清潔と云ふものよりも更に不潔の實況を現し、又は體軀美を愛する彼の嗜好は彼の熱と涙とに依つて發奮の情未だ定まらぬを動がして以て諷し

とする也、其性行既に然り其作物に於ては如何、見ずや奇を好み新を街ふの裏面に伏在する處のものは濫根浮薄也。ハートの矢も射られたる也、羽根ある小兒の婦人に抱ける也、男女喃々の濃艶のもの也、婦女一面の弱點を捕へたるもの也、若くは河内屋也油地獄也煖火箸也、縁喜のわるき鳥の悲哀なる聲もて謳ふ新詩也、彼等のなりうこれたるものは新聞の艶種もの也、如斯ものは日々夜々彼等の筆の毛のちびる度毎に幾百千人に對ひて毒氣を吹きかけつゝあるなり、近時無道念に養生せられたる多くの胃病患者に等しきものは、甘味を好むが如くに濫根浮薄の文學を好みて、あるまじき道、恐ろしき濁流へ陥落しつゝあるなりけり、小偏美の害毒決して蔑るべからず、

(未完)

轉便厲聲錄

團末 はなぶさ

▲予が親友不新君は當世得がたきの志士なり、彼は宗門を憂ふの余、遂に不圖の災にかゝりて園圃中にあり本團長本多師の下に書を寄せ律二首を送れり

八月二十八日發の御はきは、九月一日午後接手仕候、全文觀誓の聲を以てよまれ申候

吳松果然 大慈大悲の光は、園下の頭にインスレーヤンとなりて下れり、園下は既に高きものより、燃ゆる火に依りてマブテマを受け給ひぬ、園下は仰の血と、正義の熱とは、宗門統治のみ手に宿りて、聖門下の全宗門は、光榮ある發達の途に上りし事と信じ、小丘に茲に祝意と敬意とを捧げ候

獄裡偶成 律二首

秋入關山氣始清

誰知獄裡想新征

縱作姦雄逢車裂

寧抱鬼圖待後名

大陸風雲今漸動

書生一劍策當成

中霄枕冷難爲睡

夫外時聞孤鴈聲

一片雄心欲建功

劍鳴寒湧鐵窓中

清朝乱有憂時淚
猶點誰知江戶畧
建兒幾百今何在

李氏衰無與國公
敗餘轉恨慶長式
西蹴波濤驚海風

意氣旺なりと云ふべし、此他我にあてたる葉書

〇〇〇〇〇〇兄弟下 兄等は今や燃ゆる火に依りてマブテマを受け給ひたり、兄等は今正に新たに産は給ひたる也、其信仰の血は如何に鮮やかなる色を呈したるよ、其正義の熱は如何に光を放ちたるよ、而して予が兄が發したるは、如何に親善と満足との聲を以てよまれたるよ、〇全宗門の合同問題あるの際、團長改革の傳せ至極適當に候、宗教法案の問題もある事故大にやり玉へ、〇本宗評議員の合議法の制定、學校問題、對外布教問題、此等は兄等が双肩に、同願にして、亦將に敏俊なる諸兄に依りて着手されたる事と信じ候、宗友會に出席して大にやり給へよ

獄裡にありても如何に正義の發揚に苦心せるよ、此はか時事を論じたるものもあれど少しは、かかる處あれば掲げず、不新兄よ、兄の苦心せる處は皆予の苦心せる處也、乞ふ兄あまりに思に過さずて身体をいたむるなかれ、遠からず相抱いて語る時來るべし

▲小高氏は亦信仰家を以て開の同じく不圖の難を以て

不新兄と共にあり頃日總々として正義を傾念せるの書を送る、文々至誠溢れり、氏は宗門の爲には生命をもいとほざるの人、獄神信心の試練は更に確乎たるものを探り得られしならんなり、乞ふ健在なれよ

懸雲兄に酬ゆ

(都鄙趣味の比較、宗教に)

忍 水

懸雲詞兄
前號に於ての兄が都鄙趣味の比較と宗教は最と面白く讀まれ候、否うらやましくも讀まれ候、生とて素山間に生長しもの十數年來都會に漂泊して、今は殆ど其芥くさき臭氣とそれに似たる人の心にいやけさせども、宿業のたゞり除きやらで今數年は東都の人となるべく候、否大方は此處の土に成るべき乎、思へば奈岐山のふもと、日本高野に自然の風土を愛せる兄が今頃ぞ欲しくもあれ、朴直なる野人、和樂なる家庭、黄なる秋田、睡むが如き山野、平和の相せる牛と馬、うして

二十六
君が時々家聊の人に對しての佛陀の福音を傳ふるあり、予は如何に羨望に堪へぬぞよ、
懸雲詞兄

予は何たる不幸兒なるぞ、暇が大の好物と見たり、予は今大俗物と一生涯を戦ふべく準備を爲せり、されど都の俗物と火花を散すべき十年後の時代は、鑄て田舎の順直なる老爺婆と救の語を交へべく樂み居り候筆は意をつくさず候、
時下さむさに向ふ健在なれよ、

伊豆伊東専門夏期講習會日記 (續)

張 大 磊 翁草

三十日曇 水曜
午前六時鈴木榎意拉三同行二人ヲ以テ程。到ニ熱海外之伊豆山温泉場。故ニ旋宮同行者皆去。推餘ニ余一人之隻影ヲ耳。此ノ日。舉館之會員四十餘名。爲ニ極ニ發汗浦川奈之靈地。午前六時。負。餉。出發。各位草鞋單體。活潑上ニ程。可。謂。壯快。ト。
三十一日 晴 木曜
午前六時。講義聽了。十二時歸途中。得ニ泉州界瀟瀟

護土村上貞藏之導ヲ以テ。近年所ニ發掘ニシテ伊東朝高城中之舊園地ヲ方今所有之主人ハ。則舊墓之士小原庫者也。先賞ニ此ノ地ヲ。開拓中不ニ圖。掘ニ當。一。地。温泉湧出。隨。掘。隨。出。廣。概。數百弓。周匝一帯。大小。奇石。其數無量。形態怪異。變幻白靈。如。虎如。羊如。牛如。馬如。狼如。犬。其小亦。如。蛇之蟠。如。兔之飛。奇態變狀。苦舖銜斑。古色蒼然。實。如。四季伯暗之圖書。主人能愛。客ヲ。待遇至渾剩。辟間之畫畫骨蓋。夥多以充。填。一室。中。有。一。隻。之。金。泥。屏。風。有。三。耕石翁之水墨山水中。貫名松翁之大字題詩。頗是絕品也。主人曰。此。他。近。拓。得。一。庭。池。均。是。朝。高。之。故。園。而。其。他。形。全。摸。心。字。ヲ。謂。往。視。之。余。遊。意。勃。發。再。尾。村。上。氏。而。行。地。形。雖。不。如。前。大。奇。趣。百。出。全。存。心。字。之。形。之。池。也。蓋。此。法。多。是。鎌。倉。時。代。之。遺。法。而。元。龜。天。正。以。後。千。家。小。堀。家。之。庭。庭。式。亦。未。過。折。三。美。其。前。法。者。歟。從。是。登。海。光。山。佛。現。寺。該。寺。弘。長。年。間。聖。祖。教。歸。之。日。手。影。自。像。以。附。朝。高。充。多。年。之。恩。遇。朝。高。敬。居。其。下。風。營。淨。刹。於。山。嶺。案。置。尊。像。云。爾。東。南。開。豁。面。海。三。面。一。帶。負。山。積。翠。萬。丈。實。米。家。得。意。畫。圖。中。之。名。刹。也。

午後七時。點。幻。燈。於。講。會。場。其。說。明。者。田。中。門。下。高。足。伊。藤。智。靈。也。點。數。逐。次。數。百。箇。種。悉。是。聖。祖。經。歷。之。靈。場。而。今。現。身。實。如。其。境。悖。感。白。靈。增。一。層。之。信。意。十一時歸館。
八月一日 晴 金曜
午前七時講場出席。十一時歸館。以午後一時開ニ本化專門大演說總會。猪戶劇場東座ニ聽衆滿場。拍手喝采中。講師加藤文雅。山根顯道。山梨休息寺武田宣明之數師交互出演。六時放會歸館。

蟲

賤の苦屋に秋風吹きて
一葉の桐は驚端を打ちぬ
しのぶ

鳴くは虫のあはれを語る

千草日々草露もる下に

月の無き夜は泣く聲さらけ

父さま母さま呼ぶのであるか

静かき寄れを響の足に

息ひは怖恐をいださしものか

罪な事すなはれの虫は

わしの言ふのに應へもするに

虫よ小虫よ月ある夜は

誰が戀しい姉さま妹

余偶有感於時事以古體六解
二韻到底格作野調

華城

正氣一發坤輿驚、
近時綿流道風去、
好取刀銃念珠、
放言綺語無寸益、
鴛子靈智未能董、
投匙文殊逐化輩、
先師蓮聖垂悲淚、
願逆信誘示四照、
明治壬寅晚夏次、
嗚呼癡哉像漢出、
重法忠兒奮且厥、
天日皎輝同既陞、

失題

遺訓誤看岐幾又、
安心立命如何是、

志士仁人慨然盟、
往年維摩今何生、
手弄俗律代經精、
情態墮習劇暴橫、
目連神通非所征、
默拱禱處阿逸聊、
不病自己病群愁、
教旨觀相本別頭、
吾門簷裏存深憂、
列祖威烈將莫留、
同信義軍翕乎鳩、
月照中秋蓮荻洲、

唱死道人

兒孫紛亂々如麻、
口唱聲々常住家、

法樹連珠

椎園詠草拔萃

海上胤平

歌 筆の海机の嶋のさくら貝

書

うはへよくかさなしたる水莖の
にこれるあどはどめすもあらなん

紙

陸奥の眞弓の紙にもものゝふの

軍かたりはうつしどめなん

机

文机の上をばらひてうちむかふ

心のちりもすゑどうおもふ

墨

あはれこの松のにふりは消にして

千歳の後も世に残るらん



暴風雨

窪田孤松子

時は秋高くして馬肥へ、天朝らかにして氣澄める、
田舎の風光は、闕然として幽靡然として曠、而して刈
る者、餉する者、荷ふ者、戴く者、徑路に絡釋して絶
ず、男女の謠ふ稻歌は、互に相和して最とも程かに、
粒々辛苦の功なりて、之を倉庫に運ばんと、或は牛に
鞭うち、或は馬を驅りて、右往左往せる田舎の光景、
此一幅の好活畫は、都人士の未だ知らざる、飾らず粧
はざる、天然の詩景にして、拙なき筆に寫すべくもあ
らず、彼等は膚を裂くが如き寒風を凌ぎ、燬が如き三

伏の劇暑を忍びて、今や其結果を視て喜びの眉をひらきたるに、昊天何ぞ無情なる、去月廿八日の暴風雨、午前八時より午後二時に亘りて、一天墨を洗せるが如き色を呈じ、天地は懐情暗澹として物色を視ず。巽の方位よりして天地も推けんや勢ひを以て、浩然たる烈風の襲来し、谷をも埋むべく、山をも崩すべく、木をも折べく、石をも飛すべく、况んや田畑をや。時計の未だ一廻せざる間に、豊熟せる稲田は草土の如く、蒼々たる白田は其形を止りず、觀るも隣れに想ふも凄き形状と疑はれ去り、嗚呼多くの勞力と時間とを賭して、漸くに求め得たる、其報償を二三の時間に於て、惡魔の爲に奪ひ去られたり、節面白く彼等か田臥に於て、稻歌を詠ひしは、實に夕べの夢となりぬ、彼が手にありし鎌は、此雜草を薙んが爲か、彼が手にありし鎌は、此雜草を薙んが爲か、而して豊田は暴風に奪はれ、青嵐は雨師の怒りに遇ふ、實に昨日の稻歌は今日の涙、而して鎌をしくして、此多氣を如何にして過さんとするぞ、老は渴を醫する能はず、兒は飢餓に泣く、嗚呼實に惨の又惨なるものにあらざるや、唯に夫のみならず、雨露を凌ぐの家は倒潰す、其數

斷腸彙

原田容廣

幾百戸、五人の家族共に枕を並べて壓死せるもの、二人三人の死の神の手に捕へられたるもの、各所にありとかや聞けり、何等悲惨の物語りぞや、余は之を筆にするに、紅涙滂沱たり、之を聞もの之を讀んもの、誰か一掬の涙なからんや、桑田變じて碧海となるの譬へも、今や余は目前に之を觀たり、而して筆を進め來りしも、情せざり心恍惚として、筆の歩みを運ぶによしなし、あはれ世の富貴に誇れるの人人よ、驕奢を止めて此天災に泣ける、無辜の百姓を救へかし、實に農は國の基ひにして、我等が生命を托するの人なるぞ、嗚呼此災變は何に由てか來れる、石垣島に起りし低氣壓の通過のみにあらず、謹みて聖祖の安國論を繕げば思ひ半ばに過るものあらん、悲風書窓を吹ひて、机上の燈火明又滅、筆路を辿るによしなく、余は唯唯然として涙を瀧くのみ、嗚呼悲の極の極、實に泣ざるものは人にあらざるなり。

○眼を開きて吾國の物質界を看んか、文明の素用あり

以て英と同盟すべし、勿地閉ぢて精神界を觀んか、枕歌歎嗟の外なし

○人は母体をいで、三年、漸く其の膝下を離れて、身五尺に達せば是れ人と云ふべきか、非ず、教育を受け始めて始めて人なり、その教育ある人又全く人に非ず、宗教あり迷信なく、眞信仰ある人を以て人とす、日本國に此、若干かある

○凡て物品の洗濯は、心地克き事なり、然れ共そは心地克き時に於て心地よし、惣て心の洗濯は、心地悪しき時に於て心地克し、則ち宗教上の洗濯は、心底から誰人も、心地の克き事ならずや

○ダニロカ氏云く、耶蘇教が日本に於て從來一人の信徒を得るに、平均六千圓を消費すと、古來金錢の爲めに身を亡ぼすと云ふが、今は金錢を以て、心を殺す此れ二十世紀に於ける、殺心器乎、可恐、世尊曰惡智識は二俱に壞ると

○孤松子が頼りに、詩的生活を叫ぶ、大ひによし然れども其の己れ獨りを樂むか、獨樂は古今通じて聖賢の大禁物だ、君世俗の塵埃を脱するはよし、然れ共應化を如何せん、君仙人然たるはよし、全く化する勿れ、

下界の人を如何せん、エーナルあるや否、佛界にも所具の九界がある、佛陀は如蓮花在水と説き給ふ、現代仙人は左程必用がない

○秋は己てに老ひ、たり郭公又己てに來る然れ共、子規は逝けり、何ろ都路を去るの遠かなる、子よ如何なる音信を持ち行きしか

○ダンマバラト氏が、佛教純粹なる説には迷信も儀式もない、只一の活動あるのみで、寺院の中に枕歌し合掌し鐘を叩く等は、抑も末の末だど、頼りに活動説を唱へた、ニコロデ十萬の僧侶の多くは、何を成しつゝあるか、向寒の候だ最早ソロー、後爐でも入れて、高き軒でもして居たら、善き心地デアロウテ

○飲食が全然腐敗すれば、人は顧みないから煩惱が少くない、人も完く腐敗し随落し盡せば、他が相手にせぬからよいの、半墮落半腐敗が多いので、社會、害毒を流かし、煩を蒙る者が多い、ニコロ世に尊い物は、大腐敗と大墮落の外はない

○美作地方は先づ山國なので、天然事物崇拜が大分多く、所謂靈風宗宗教客体が、明治聖代の、今日して尙用ひられて居る、云く大岩神、云く深沙大王、云く山木神

云くお蓮さま、云く何に是れ皆な醫師の代用
○邪と悪と醜とは、多く人の忌憚する處で、美と善と
正とは、皆な人の迎へんとする處なり、去れど全然惡
のなき善、醜のなき美、邪のなき正は、あまり珍重で
ない無味である

轉迷開悟

今成 乾 隨

吾人の娑婆

で満足をして居つた連中も近頃非常に厭世的所感に
擊たるゝものがある何か動機であると云ふに鳥島の破
裂と云ひ去る大暴風濤と云ひ自然界か天變地天と云
ふ惡魔の相貌を現はして來たからであるこの調子では
宇宙間は大破壊となつて空無に歸するやも斗り難いな
ど、杞憂して人心恐々と云ふ状態であるア、水火風の
三災は實に驚くべきものであるさはいへこれ娑婆の
當相として如何にも許方なき次第である

依正の關係

とはこの國の消息を解決して余りさるのだから吾人

せりし又「我が淨土は毀れざるに而も衆は燒盡きて憂怖
諸の苦惱是の如く悉充滿せりと見る」と斯の如きの聖
語は如何の理義によりて解釋せらるゝやと云ふに

十界の依正

と云ふ問題に歸するのである有情にも十界あり非情
にも十界ありて一の衆生か即十衆生一國土か即十國土
となりて互に甲と甲、乙と乙と云關係して自己か佛陀と
なれば國土淨土となり自己か人間となれば國土も人界
となる而も十界の依正か自体常住な譯して苦樂昇沈の活
動の不思議があるので因果の規律によりて支配されるの
てある迷苦の因果を解説して悟樂の因果を求むべきで
ある其の手段は如何せば可なりやと觀するに

信行の要道

を修するより外はない吾人の知慧は屈歩蟲の進むか
如く假各の菩薩界に進むも佛陀の境界には至らぬので
難行のみで功徳はない久遠本佛の毎自作は念の妙悲願
妙智力によりて「南無妙法蓮華經」と信念口唱すれば
吾人の修行其の儘佛陀の境界と感應道交して茲に信智
一体の因縁は結ばれるのてこれか即ち
轉迷開悟の聖訓親教である

の正當な果報として依るべき娑婆である蟹は自分の体
次に穴を堀る如く吾人は吾人の感得すべき娑婆に生れ
たのて何も不足を云ふ可き資格はないのであるこの娑
婆で満足か出來なければ大奮發をして吾人の理想に應
ずる國土に生れ得べき準備か大切である

本地の娑婆

世界は三災を離れ四劫を出てたる常住の淨土なりと
は宗祖の教訓であつて水火風の三災もなく成住壞空の
四劫もなく常住不變而も快樂充滿、自在無礙亦清
淨潔白何とも云へぬ佛陀の境界である彌陀の淨土は彌
陀の願力で出來たのて十却正覺の以前はないから有始
の淨土である依て有終の結果は免れぬ無常の淨土であ
る本地の娑婆は本佛の依止する處でともに常住である
これか吾人の娑婆と如何なる因縁を以ておると云に

娑婆の兩面

てふ不思議な問題である衣服の表裏あるか如く娑婆
に淨穢の兩面あるのであるこの有様を即の一字を以て
説明する背面相續の即でもなく二物相合の即でもなく
當体全是の即である經に「衆生劫盡きて大火に燒かる
ゝと見るときも我が此の土は安穩にして天人常に充滿

奇遇談

(白鳥會、題詞、
辻法、大橋氏。)

九月廿四日は彼岸の中日だから、午后から淺草の弘通
所で演説會があるとの事で、予も出席したく御書一冊
を携へて、新谷町の假居を出たのであるが恰と其時が
後の二時過ぎる頃であつた、松山町から馬車に飛び乗つ
て上野に着いたが、不圖白馬會の繪畫が觀たくなつた
ので、思はず其處から歩みは公園内に向けて進んで居
る、それは友人赤松藤作君のが頗る好評であると云ふ
とがチラと新聞で見えたり、なほ本年の洋書の夏期講
習で、多少眼も肥へたであらうと思ふ處から、何だか
見たくてくく。

さて友人のも見當らず、少し冷望の眸でブラ〜と道
遙ひて居たら、園内の一隅に數十人の一團樂があつて
赤や紫のお題目の旗さへ見ゆる、さてはと思つて近か
よつて見れば、年頃廿七八の僧侶の方が頻りと演説を
行つて居るので、

半時ばかりも聴いた時に、さて辨士の方のたまり、其處
には一人の御僧と羽織袴の人々のつとほるゝから我の
松尾生なるものにして同じく日蓮門下なることを語つて

この殊勝なる園跡は何方なるやと尋ねたら一人のお方が名刺を……、それで鎌倉の田中師の門下桑原智都氏等なるを知り得たが、僧侶のがはは井上日也師であるさうな、何れ兎もあれ貴兄等には最おしき席ならんも、予にも一言を述べさせ給へやと云ふたので、桑原氏は井上師に何やら交渉してありしが、難て差支がないとの返辞である、曩の辨士も終つたので予は設の檀に進んだ、幸持ち合せたる御書を拜讀して、日蓮上人の御徳に對し聊唱揚し奉つて、そして上人が奉持せさせ給ひたる絶大の御法の一分を鼓吹し奉つたのである。

うれも終つてので其増から退いて背後の方に歩いてくると、そこへ洋服着なせる一人の紳士、その紳士は予に簡易なる一禮をなして、さて君は岡山に居たる人ではないか松尾さん云ふ人ではないかとの問ひ、續て其人は我は京都の大橋重助であるとの事大橋重助氏は京都で有名の紳商であつて本宗の信徒である、岡山の久城氏とは取引上から交際もあつたので、かね／＼予も其名を聞いて居たのだから、大橋氏も同じくさうだううで、

こんな處で偶然邂逅すると云ふのは頗る妙なもので、氏も其初對面の奇遇を喜ばれたやうに見受たが、予も何となくなつかしくもあり嬉しくもありであつた、色々談したいともあつたのだが、何分予は弘通所に行くべく心が急いで居たので、そこ／＼にして分袂したのである。

之は別だか其演説の席を割愛せられたる桑原井上兩氏にこゝで其好意を謝しておかう、(忍の字)

子母子をいたむ はなぶさ
 一聲は血になこりなり郭公
 一葉虫一聲のあはれさま
 小高氏に送る
 雲がくればせし程月の見たさ哉
 不新兄に送る
 語られし月は二人を照しぬる
 同 同



來者不拒
 懺悔錄

予が信仰上の誓言、
 美作 太田伊代平

佛とは死人の異名にして、僧とは經を讀む職分の者なりとの解釋は、妹が飲む乳房を羨しがりて母の膝元を狙ふ頃に於て、余が佛教に下したる大斷案なりき、日を經月を重ね小學校に教を受くる年頃となり、恐しき鳴神は虎の皮の褌を締めたる鬼でもなく、日々東より西に運る太陽も自ら動くにあらすてふ理屈を會得するに及びても尙は如上の宗教釋義には動搖を來さず、爾來幾年學に益雪の苦を積まされども浮世の埴風は吹き驅されて、多少の小理屈を覺る、覺束なき腦漿を絞つて大膽にも、凡百の事物に向ひ解釋を試みんとするに至りても尙は／＼佛教に對する觀念は依然たり

き、否寧ろ度外に置たるなり、否現時佛教の狀態實に斯くの如き也。
 親友松尾英四郎君佛教に歸依してより、君と會する毎に君の語柄は常に佛教ならざることをなし、諒々切々説て倦まず、吾之を聞くの初死人の講釋何の益する所かあると、敢て耳を傾けんとせざりし、予の不頓着なるを見て或は詰るが如く或は叱するが如く或は怒り或は嘆き面して復説く、時に或は予も首肯する節なきにあらずされど又大に論諍することあり其不可思議なる説に至りては唯一笑に附し去ることあり茫然自失五里霧中に彷徨ふことあり、未だ容易に信を起すこと能はず如斯にして又幾年月を重ねき、
 今春播州姫路へ掛さし歸途久し振りに君を岡山市岩田町の紫雲英堂に訪ふ、居ること三日、俱に食ひ俱に寝ね、且語り且談す、例に依て統一佛教を説くこと精細深奥、而して特に予が爲めに法華經一部及日蓮の遺書數十卷を取寄せ其要點を指摘して彼此對照、談論の的據を舉示して反覆幾回殆んぞ懇切を極む、茲に至りて稍了得する處あり、然れども尙は信仰を捧ぐるまで不及はずして歸郷の途に上れり

家に歸りて後數十日唯何となく宗教の事念頭に持りて君が談論の節々思ひ忘るゝ時なし、而も其何が故に如斯乎を知らず、一夜眠られざるまゝ、又此不思議なる觀念の浮び出で、心神清澄、更いよく、聞、此時此折支なる哉妙なる哉、忽然として信仰の曙光を認めぬ、開は彼の妙法全能の歸一主義なりき、予は此時に於て何とも解し得ぬ一滴の涙溢れぬ、久遠本佛の大慈悲、嗚呼尊しとも尊し、我知らず南無妙法蓮華經を唱ふ、佛教に就いて聽き得たる談話話説の謬理に印せられたるもの、此時に於て悉く赫耀たる光明を發しぬ、恰も彼の一線より分出したる線々支頭の無數の電燈が、一時に點火せられて烏羽玉の闇夜倏ちに、晝に等しき光明界と變せしが如し、嗚呼尊き哉

世尊入滅三千年後の今日、人心は汚れに汚れ世道は乱れに乱れたる今時、妙法歸一を失ひたる旨致後き方便の諸教を用ゆる各宗、乃至もろくの邪教は夫れ何の益する處かある、されば也我日本國に生を享けたるものは、妙法蓮華經の強盛深重なる信者となり、現當二世の所願決定圓滿ならしめ、施て一焰浮提に及ぼし、人心世道の救済に奮勵せざるへからざらんや

吾は今、松尾君の説導に因りて、逢ひ奉るに難く加之も、難信難解なる法華經の一信者となることを得、無限の光明に浴するを觀喜すると共に、其速に信に入らざりしを恨む、然れども猶幸に春秋乏しからず、佛と以て死人の異名と思惟するもの、經をうらよみにするのみを僧侶の本分と心得る以前の吾が如き者に向つて、佛恩の無量無邊なるを諭し、尙は力の及ばん限りは斯道に勤いて奉謝の萬一に供へんとす、經曰一切業障海皆從三妄想一生若欲懺悔者端坐思實相衆罪如霜露一惠日能消除と茲に懺悔を録すること爾り、



統一週報

●教用三日の旅

青村 忍士

忍水雅兄
御承知の如く、去る二日己後引續き宗務に執筆せし身の

、昨午後自坊に歸りしに、農事集三更の頃迄何くれ寺務を處理し、暫しまごろみしと思ふ間もなく老母にゆり起されて、今朝四時起床、本尊への御禮もろく、茶漬掻き込みて草皇停車場に駆け付け、やつこの事五時十一分品川發の列車に乗込み申候、夢うつゝの中に赤羽驛にて中仙道線に乗替へ、大宮より左折始めて未見の風光に接し睡眼漸く明らけく相成申候、千葉縣各地の擔狀に引替へ、中仙道一帶に過日の暴風雨さしたる被害も無之様ナにて、殊に新町、倉賀野、高崎あたり利根の上流に副へる土地、灌漑の利便ある沃土にて穰々満々、茲處農民は數腹撃壤のささげの見へ申候

礦部の驛を過りて座ろ温泉に入浴の全勃發、殊には佐々木盛綱の舊跡訪ひたくて叶はざりしも、急ぎの旅のせんすべなく、車窓徐かに妙義山の屹立たる斷巖奇峯を雲間に眺めて聊か心を慰め申候、横川驛より名にしおふ碓氷の峠にかゝり、斷續二十六個の墜道是は又奇觀に候、「アフト」式の上り坂、滾車はあと押しも用り兼ねむじき徐行にて、出ては又這入る墜道と墜道との間、谷間の景色得も云はれぬ眺めに

御座候、あはれ今一ヶ月もおろか、せは満山の紅葉浴腸を洗ひてんものぞと思ひ候、上田の城趾を見て眞田幸村の往事を追憶し、坂城の驛にて驛前眼を造る高丘に櫛比せる大建築物、あれは何よと同車の人に問へば、遊廓との答へに覺へず嘔吐を催はし候、篠の井驛の西南懸々たる大山脈、地圖を播みて其途捨山なるを知り、不祥の名に今更ならぬ不快の感覺を呼び起し申候、斯くて午後三時十分信州第一の都會長野に着、驛前の對面館(舊本陣藤屋支店)に行季をわろし申候、忍水雅兄

牛に連れられて善光寺詣りのうれならで、予は直ちに車を命じて車夫を案内に善光寺を見物仕候、寺は停車場より正北十八丁段々上りに丘上に踞踞せる最も位置よき場所候、ゆく／＼目にとまりしものは「かるかや親子の舊跡」の石碑を呼び物として迷信者をねびきよせつゝある往生寺、長野郵電局の揭示に「配達夫募集望の者は申出すべし」とありしと「うちみ骨痛の盟灸の看板と最も眼につき申候、基督敎の會堂はみすば

らしく小さき門標を掲げ、町並家毎「佛教徒信濃國民同盟會印」の焼印を刻せる木札を見受申候
忍水雅兄

善光寺の本尊は御承知の如く、物部尾與同守屋の父子が信念の衝突より浪花の堀江に投棄せし佛像にて、疑もなく百濟聖明王より帝室に貢獻せし釋迦佛の尊像に候、开は歴史上明白なる事實に候、さるを何日の程よりか三尊の西院と云ひはやして三國傳來の縁起論をさへ流傳せる、念佛徒の誣惑中々巧みもの候、予は其縁起の巻を購ひ求め候、他日何かの證左にもと思ひて候、それはさて置き現在の善光寺は中々以て此山間には珍らしき大建築物に御座候、長野市の善光寺か善光寺の長野市かと申せば、無論長野三萬五千の人口は善光寺の爲に年々殷賑を來す次第の事に候、之に付ても思ひ出すは、聖祖門下の四衆が派別の觀念に驅られ妄想の夢より覺め來らざる限りは、此善光寺の本尊も素との釋尊にかり給ふ事覺束なく、隨、善光寺は何日迄も惡光寺にて、信越の同胞は永く泥梨の苦因を脱れ難く、げに不懲の次第に候
忍水雅兄

義哲及世話人兩三出迎り呉れ、總て車を飛して顯本寺に着けば惣代二名寺門に出迎申候
忍水雅兄

當地は有名の雪國にて毎年冬期三ヶ月の間一丈餘の積雪を見るどの事に候、されば家々皆軒を深くし雪中互ひの往來は此軒下によるものにて、宛然銀座あたりの車道と人道の如く、冬ならぬ今も徒歩の人は多く其軒下を通行致居候、唯如何にも眼さばりに相成候は其軒に柱の數多き事に候斯せされは積雪の重量を支へ兼ね候とならんと被察候、當地は舊時禰原伯の領土にて十五萬石の城下人口一萬六七千越後一國の旗頭なりし由に候得共、今は商工業共悉微不振、凡て勢力を直江津長岡等に奪はれ候由に候
忍水雅兄

予は喫茶少時徐ろに今回特派の理由を傳へ、午餐後談話數時事情全く疏通して惣代等も大に歡び、予も亦其使命を全ふせるを心竊に欣び申候、其談話の顛末は事宗用に屬して茲に筆すべくもあらず

かくて所用は全く果てしものから、今晚人を集め呉れよ説教一座勤めなると申入れたるに、最早黄昏に近し

予はうここ、案内者の云ふがまゝに、大本願、大勸進さては公園地、新公園地等逐一見盡して、終りに八幡神社の境内に至り候、此處は善光寺と地續きにて一段高き丘岡に候、丘上の城山館と云へるに案内せられ愛らしき小雛に導かれて其樓上に登り候、一望快瀾長野市を眼下に視下し、犀川築摩川の兩流に狹せられたる所謂川中島の古戰場、雙眸の中に落ち來りて壯快言ふへからず、暫し喫茶養氣に餘念なかりしが、隣樓に集れる酒徒濁み聲高らかに「山寺の和尚さんが」とうなり出し、之に和す、賤妓の絃聲耳にさはりてければ、遺憾ながら千古快心の史的土地に默禮して分れ申候
十月五日の夜
（長野縣野村町野村館にて）

忍水雅兄

越後國高田より申上候、今朝六時二十四分長野發の下り列車にて八時五十五分當地着仕候、四面唯連且たる山又山、僅かに通する谷間と縫ふて一聲の浪雷長蛇蜿蜒として疾走北行、瀟目唯豊かに稔りし黄稻と白燈々たる蕎麥の花盛りなるとのみ、他に何等感興を興ふる趣味も無之、さりとて田舎新聞も見るに懶く、シガーの煙に漸く無聊を慰し申候、高田驛には留守居僧山田

今より集めしとて思ふ様には參詣なしとの事、然らばとて席に居合せし五六の人を相手に法談を始め、晚餐後山田より一念三千事理の相違點を質問致し候、斯は殊勝なる質問よと興頓に加はり來り、先づ渠の事理一念に對する會得點を質問せしに、全く優陀那院流の無明縁起に過ぎざるものから、予は大に之を打撃し盡して當家獨得の十界事常住、佛界縁起の妙義を懇篤に曉諭し、信念問題、本尊問題さては日宗各派統一の現在將來等、何くれと不思議意氣昂り光烟百丈位には相掲り候事と乍吾打思ひ候、渠は若きに似合はぬ修學篤志濃厚直の人跡にて、熱心に予の辨論を傾聴し、事と云ふ事多年の疑ひ只今始めて相分り候迎感謝の意を表し申候、傍らに聴き居し惣代寺も何等かの把住を腦裡に染め申候様確かに手答あるを覺へ申候、寢に就きては后十一時半に候、此書は幕中に相認め申候、敬具（六日）

忍水雅兄

高田より直江津へは僅々貳里の距離にて、親鸞の請居地たる小丸山の別院及五智の國分寺杯隨分共一覽の價

値ありきの事、且つは北海の荒浪に嘯きて九十九里灣頭に於けりし呼吸の愉快を再びしたく、思ひは矢竹に候ひしかども宗廟及自坊に無事要件の累積せるものあり、一日の閑遊を肆にするを許さず、今朝六時三十分分高田發、山田義哲及惣代二名見送り呉れ候。山田は近き將來に於て出京可致都合に候、可憐の青年あわれ修學の利便と本人の一身に與へられ度候

乗車と同時に數日來の疲勞を覺へ、睡魔襲來何とも眠くてたゞならず、まよと麥酒一瓶をわはりて革囊枕に轉りてまどろ申候、非常の冷氣に夢覺りて只見れば永時西尾輕井澤に着し居たりき、寒さも道理此地一面海面を抜くこと三千〇八十六尺との榜石を見申候午後六時二十分亦羽着、晚餐をしたゝりて山の手線に乗替へ十時品川の自坊 還歸本土、復命書を認め畢りて安らげく寝に就き申候

此行往復三日、信越兩國人の言語に訛り少なきは偏鄙に珍らし感じ申候、養蠶の本場たる熊谷秩父兩郡より土野一圓信越地方、なべて期業の逐年發達しつゝある事其原野、畑、山等一面に桑樹の夥しさにて知れ申候忍水雅兄

僧正に委嘱し同寺に就て實地の調査を遂げ且其改善を命すべき事項を定め以て一宗法義の肅清を計り上佛祖の本旨に照ひ下は宗義の純一を期し聊か一宗僧侶に對し道念の涵養に資する所存に有之候依て別紙委嘱狀を發するに際し其主旨を言明する次第に御坐候敬具

明治三十五年九月十五日

即日現下には淺草區小林大僧正に御依頼、うれより千葉縣東金なる錦織大僧正の自坊へわざと出張御依頼あり、板垣大僧正へは松尾總員を以て、河野大僧正へは山根部長を以て同じく御依頼あり、然るに河野師は病氣の故を以て自坊に不在なりしかば、さらば止を得ぬ事なりとて明る十六日宮谷よりは、板垣、小林兩僧正は松尾大津の兩氏を隨員となし、錦織師と東金に會したるに、錦織師は河野師の不在なれば本多師に是非同道せられよとの事にて、其處より四大僧正山根、松尾、大津の七名は腕車を運ねて布田へ赴きたり、時に午后一時過也、直に住職中田大僧正に面接し、各僧正交るゝ其宗旨改善の然るべきを説き、中田師も亦心よく承諾し、左の改善に關する事項に就ては直に即

秋高肥馬の好季節塵る饀肉の歡有之、お互ひ層一層快心の事業に從事致度念願此事に候、敬具(七日夜在惠日山窓燈下)

○布田藥王寺本尊勸請式改善願末

願本法華宗に於て常に紛擾の根元と迄に噂されし、千葉縣山武郡布田藥王寺本尊改善に對しては、イヨ／＼客月十五日日本多管長事務取扱現下には法務部長山根顯道臨時宗務廳詰松尾英四郎二氏を特派する事に定め、別に板垣、錦織、小林、河野の四大僧正に左の委嘱狀を發したり

本宗類年の紛議に關し其根底する處を深察するに全く宗義上の觀念に起因するもの有之曾て前數代の管長より數々宗義蓋正の訓令を發布せられたるにも拘はらず布田藥王寺に於ては宗義違背の事項を存續し今猶ほ純然たる改善となさざる趣告發者も有之此際等閑に附し去るに於ては立教開宗の元意を破却するのみならず宗内の紛議に到底平靜に歸するの日無之ものと認められ候依て本職は宗法護持の職責に鑑み茲に貴下及(各通他の三大僧正の氏名記入)の四大

時發行受書を差し出されたり

- 一本門の本尊を完備し且つ其全軀を表顯し常恒之を拜觀せしむる様安置すべし
- 一藥師如來の像若しくは類似の像其他藥師に關する記名ある物品は悉く之を取除くべし
- 一瀋祠の非置に類似の像あるものは悉く之を取除くべし
- 一門前に左の標示をなすべし

當寺の本尊は從來藥師如來と傳へ來りたるが宗法に違反し妄信を醸生するを以て今回之を改め本門の大本尊を安置表顯條參詣者は決して藥師如來より利益を受くるものと思ふべからず宜しく本門の大本尊を信敬すべし

右告示候事

かくて平素の大疑物たりし布田一件も、至極穩和に事濟みければ、錦織、板垣、大津師等の一行は其處より直に各自坊へ向けて、本多、小林、山根、松尾師等の一行は分れて日向停車場へ着したり、時に午后五時頃也、少時停車場前一茶店に憩ひたるが、今宵恰も陰歷十五夜なり、明月は東、半天の處にさも笑さし顔を拭

ひ、何事か意味ありげに皎々たり、四人は思はぬ月見をなすものと暫し吟詠などあり、其頃湯の流車にて東京本所の停車場に歸り、夫れより小林師には弘通所に、三人は宗務廳に歸れり、時に午後十時なり、さて東京下谷區根岸藥師堂の方に於ては、布田と同時に井村教務部長、臨時宗務廳詰里見圓海、信徒廣崎金十郎三氏を派して取調なさしめしに三氏よりは左の復命あり

御命に依り本日午前九時我々三名下谷區上根岸齊藤顯一の受持なる根岸堂に至り該人に面し來意を述べ齋中本尊の勸請正否の調査候處本尊は十界像式に新規改めあり下邊宗祖開祖の木像を安置しあるを實認仕候寶前に(奉祈眼病平癒之處)と印書せる札數十枚並に(御洗米包)敷拾有之病室とも見へたる處に(藥師消毒丸)と金字に刻せる看板有之候以上事實相違無之此段復命申上候也

右の如くなりしを以て、右受持教師齊藤顯一師に左の命令を發したるに、是亦即時執行受書を差出せり
該所本尊勸請式其他法上の事項に關し教務部長井村尚也臨時宗務廳詰里見圓海外一名に調査を命じ其報

候也
多年紛擾の根元とも見しものは、以上の如くにして遂に改革の實を擧げたりけり、宗義發揮の爲め實に悦ぶべき事と云ふべし。
右に付一般に訓示 右の如く決行ありしが猶一般へ對しても心得違なき様同十九日取扱現下より訓示ありたり

訓示 宗内一般

宗法は宗門の命脈にして宗徒たるもの、一日も苟せしにすべからざる最大要目たり依之歴世の管長數々調諭を發して本尊宗義に異法なき様戒飾する所ありたり然るに今猶は未派寺院にして往々宗法に違反せる不應爲の事あるを聞く真に不都合の至りなりとす
日生命を内務省に稟け管長事務取扱の重職に就き一宗統治の樞能上 宗開兩祖の遺旨に基き別冊告示の通り布田藥王寺及根岸堂の改善を遂行したり未派寺院住職たるもの宜しく其自己の職責に顧み宗制宗意第一章の本旨を遵奉して斷じて非違の行爲あるべからず
右訓示す

告に依り左の通り實行すべきとを命ず
一本門の本尊を完備し其全軀を表顯し常恒拜觀せしむる様安置すべし
一藥師に關する記名ある物品は悉く之を用ふべからず
一淫祠の裝置に類似の嫌あるものは悉く之を取除くべし
一門前に左の標示をなすべし
當寺の本尊は從來藥師如來と傳へ來りたるが宗法に違反し妄信を醸生するを以て既に之を改め本門の大本尊を安置表顯候條參拜者は此旨心得べし

右告示候事

而して河野日河師に於ては右委囑に對し立會には漏れたりしも、後より直に開申書として左の如く全然同意あり、
本月拾五日附を以て御委囑相成候布田藥王寺本尊勸請式其他宗法上の事項調査の件不在の爲め同拾六日出張の運びに至らず別紙三三大僧正調査の結果決定相成候改善事項に全然同意を表し候間此段及開申

●小林大僧正福井縣下三〇日誌

隨行員 大津 賢 等

福井縣丹生郡志津村字山内顯本法華宗本行寺に於ては客月二十七八九の三日を以て聖祖開宗第六百五十年、茲に宗門再興の大導師日什聖人の正當命日、同寺開基日惠上人第二百五十遠忌紀 法要を修せむとて、同寺住職、檀家、及熱心なる縣下の眞俗は、うれ／＼之れが準備に取りかかり、該法要には宗門の高徳小林大僧正親下の御親教を請ひければ現下は直ちに快諾ありて其二十五日福井縣に向はるゝとなり、予は又現下の命に受けて之れが隨行の任に當りぬ、現下の信徒高島晋吉氏は福井縣下の生れにして、該地方には深き縁故のあるより、また横山久兵衛氏は、本年春現下の中州及九州地方御巡教に際し隨々の友に漏れたるを遺憾なりとして還教はとて現下に隨行するとなれり、さて現下を始め一行の四人は、松崎事成師、中原福藏、石川倉吉氏等の數十人に見送られ、新橋停車場に着し神戸の急行列車に乗りぬ、午後六時の五分車掌の鳴する笛の音は、千車萬車の進行を促し、見送者の無事を告げつゝある聲は、何となく有常非常の感を浮ばしめり

汽車はいよゝゝ進行の速度を早やめたり。品川灣の夕景色は蒼然として物淋く、生死界の悲相を示して常寂光の佛土を顯はしめぬ、かくして夕陽は西山に没し、點燈處々に見へ、天候速かに一轉し來り、暖氣を送りて、小雨を催し北窓を叩く、夜は全く暗黒世界と化し行けり、時恰も、品川、大森、川崎、鶴見、神奈川等の各驛を越ゆる時也、それより汽車は北へ北へと走るに於て彼の音に聞へし箱根の險道を夢か幻つか消へずきて靜岡驛へと着し、進んで名古屋に至る、時は十二時を過たりなんか其頃より又たゝゝ天候一變し寒氣身に徹す、横山高島の雨氏は酒など求めて寒を禦ぎ居られたり、岐阜大垣の各驛を越て關原の古戰場を左右にし、二十六日、拂曉を迎へ、米原驛へと達し近江湖水の瑠璃面を指呼の間に一瞥し、更に北陸線に乗じ西へ北へと方向を轉じつゝ、幾多の隧道を過ぎ、車窓よりは左に怒濤逆捲く航賀灣を見へつ隠れつの中に今庄大土呂等の驛をすぎ、山河の風光に浴し正午十二時福井市の停車場に達したり、萩原啓門、内藤智厚、前田日教、加藤智明、岡澤乾珠、等の諸師は既に遠近の信徒十數名を將ひて歡迎ありて脱車の用意も厚く見受けたり、

彼の有名なる九十九橋を渡り、十二時内藤師の住職寺たる同市妙經寺に案内を受く、直に御本尊へ對し奉り法味を捧げられより暫時休息す、該寺は内藤師入山以來春秋二季の雨彼岸中はかゝらず演說等をなすより、求法に熱心なる信者は數多集り參詣者は本堂に滿ち居れり、同寺住職は小林祝下隨行諸氏の法談と欲望す、依つて直ちに說教のふれをなし、第一に岡澤乾珠師、次に高島音吉君、約十四五分の披露演說をなし法縁を結びてうれより故郷に行きぬ、次に余は今回縣下巡教の由しを述べ、宗旨の大意を語り専ら信念の一行を勧めぬ、尋で小林大僧正祝下は一時間余の說教あり、満座の信者隨善湯佛法益に接す、時に五時四十分遂に此の日は同寺に御一泊あり明けて二十七日午前十時山内本行寺巡教の途に就く、妙經寺より人力に乘じし該地に向ふ、道程三里、途中大森區信徒山崎仁右衛門氏宅へ御着暫時御休憩、鈴木顯良師信徒四五名出迎ひありたり正午十二時、本行寺住職萩原師は大勢の信者を引き連れて道中行列にて御入山ありたり、該地は人戸漸く八十戸内外にして眞宗を奉ずる信者もあり、眞門を信する行者は半を出ず、而して萩原師入山已前け、祖

先傳來の慣習的信仰を維持する風氣盛なりしも熱心なる萩原師の教化は、日に月の改善の運びを取りつゝ、健全なる道念は養はれ、今回の如き法要記念の現象を、彼の山間僻地の一部落に見るに至りしは感すべし、其着の時の如き、早くも一發の花火は其車前に轟き大なる風舟は大空に懸れり、其一聲は村落の人をして、これぞ祝下の來りたるを告げしめたる響きにして車上の祝下も思はず御注目あり、人々は或は自宅の門前に出迎ひ、或は路傍に立ち、或は人力のあとをしをなし一方ならぬ好敬の意も出て出迎を受たり、さて本堂に詣て回向をなし終りたるは二時半頃にしてうれより住職萩原師は本行寺を去る僅か一町余りなる、彼の豊臣時代より今に三百年來の家歴を續ぎ曾つて豪農を以て聞へある渡邊八太郎氏の宅へ案内しぬ、祝下は茲に安居して該寺三四の法要を修し演說說教の法益を垂れ給へり法要の狀況は次號にゆずらん(未完)

●吉備たより(中川事顯報) 炎暑堪へ難かりし三伏の夏も今はあどなう過ぎ行きて、木々の木葉も昨日にかへて何となうさびしう見ゆるゆゑ、御法の宣布を計るは此期なり、いでや目ざましき布教も我篤信會々

員等は去ぬる九月廿八日定期演說會を開會したり、其日は生憎く昨日より降りつづける大雨の爲に滿員とまでにはゆかざりしも比較上多數の聽衆なりき風雨を冒して來れる程の聽者なりければ皆熱心に聽き居たり出席辨士は

- 開會の詳
- 注意すべし傳染病恐れざるべからず
- 法華經の家
- 宗教の制裁力
- 會員
- 野上壽恵吉
- 山名 木信
- 能仁 事一

●本化宗及會 にては例の如く去る五日小傳馬町宗師堂に於て開かれたり出席者は

- 加藤 文雅
- 岸 顯妙
- 松尾英四郎
- 金山 見善
- 河原 振藏
- 長瀧 智大
- 山川 智應
- 花房 日秀

の諸氏也午后一時開會本尊論に就て合評あり一番(加藤)人法一鉢の人本尊、二番(岸)は人法一体重きは人に採る、三番(松尾)は人法一鉢の法本尊、四番(金山)は一法説、六番(長瀬)は別に意見を立つるは宜しからず聖祖御顯現の本尊に信敬するの外なし、七番(山川)解釋すれば人法一体なれども本尊に對して之を云ふは宜しからず以上の如くにして猶ほ各自數回の合評同答あり定刻四時閉會したり、次會即本月は會日廿三日にて會場は同じく祖師室、當番日宗新報也。

●弘通通新設 を山名氏は美作倉敷町に會てより計畫せり信徒影山氏は同國郷里加茂村へ行々は弘通所を新設せんとの意氣あり因に記す氏は知人へ本誌を每號數十部施本し居れり

●宗祖御會式 本月は本宗至る處の寺院にて宗祖會式を舉行せる事なるが斯る機を外さで演説法せし箇所は法益も亦多大なりし事ならん

●津山の教況 何處も同じ秋の夕暮、到處迷信盲者の多きが中に、作州津山にては顯本法華の正義傳道つやゝ愈りなく、林日法翁山名木信居士原田容廣師等各熱心に誘掖の効空しからで教益轉々饒多なるよし、

今既往三ヶ月間月並演説の演題を得たれば左に掲ぐ「人の道」「林日法」「信仰の本義」「山名木信」「神と其信仰」「原田容廣」「或所信」「林日法」「眇たる基督教徒」「原田容廣」「法華經の家」「山名木信」「吾人の衛生談」「林日法」「安樂世界」「山名木信」「人類墮落點」「原田容廣」

●連正會の活運動 小林大僧正九州御巡教の際、山陽西海兩道の顯本法華宗有志者間に發金されたる連正會は、諸般の規約成立して愈々事業實行の事となり、年番幹事野老乾爲師は抽籤法により、能仁事一高田日暢の兩師を巡教員となし、本月二日結束して巡教の途に上らるゝよし、今其規約を得たれば左に掲ぐ

- 連正會規約
- 第一條 本會は連正會と稱す
 - 第二條 本會は事務所を山陽西海兩道の各管事駐在所を以て年番に設置す
 - 第三條 本會は宗義發揚の爲め山陽西海兩道に於ける各地の交換布教を以て目的とす
 - 第四條 本會は兩道當探の布教師を以て毎年貳回已上相互に巡教せしむるものとす
 - 一項 本會の巡教員は當分の内貳名宛とす

- 二項 巡教員の撰定方は抽籤を以て番當管事之を定む
- 三項 抽籤期日は毎年一月二十八日と定む
- 第五條 本會は毎年壹回本宗の碩學高德の師を招聘し巡教を請ふものとす
- 第六條 本會の經費は各自稱信徒の淨財喜捨を以て支辨するものとす
- 一項 會計員は兩道の信徒中より三名を撰定し之れに當らしむ
- 二項 高僧招聘及巡教員の實費は本會より支辨するものとす
- 三項 經費は毎年三月九月各三十日を以て當番管事之れを徵集す

第七條 本會の實行期は來る九月已後とす

附規 但し會計細目は別に之れを定む

明治三十五年九月

●中央青年會の概況 會て記せし事ある在京都本化門下青年團體の組織になれる該會は、爾來益々盛況を呈し、八月廿七日于本中立賣本久寺に於て「開會の趣

意」三谷會善「不忠の僧」増田智靜「不孝の子」天井眞常「南無の二字に就て」野村越海「佛骨に對する意見」岡澤乾珠「護法」杉谷音次郎の諸氏出席公會演説を開き、九月廿三日には其第三回公會演説を大黒町松原下の壽延寺に開き「開會の辭」三谷會善「柔和質直者」網島龍妙「奉尊敬者」加藤惠順「不惜身命」野村越海「佛敎の生命」上島圓妙の諸氏順次出席の後、更に覺王殿問題のやかましき折衝中央青年會の体度を示すの必要ありとて、抽籤により責任辨士として三谷會善氏「菩提會の真相を論じて青年會の趣旨に及ぶ」の題下に堂々辨し去り辨じ來りて大喝采を博せし由、實は該會は一月二回普通專門の兩部に分ちて講習會を開き居るよし、今其勸誘書并に規則を左に掲載せん

本化中央青年會勸誘書

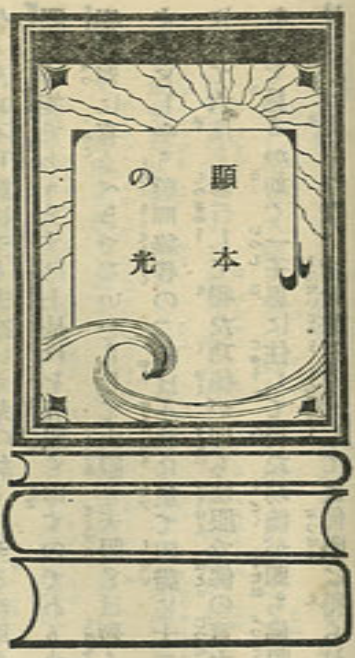
今日吾輩青年の探べき路當二つあり一は舊地に聖祖の眞意を隨ひ清浄なる信仰と滿腔の熱情とを以て宗門の新興の鴻業に従事し以て物質的濁浪の漲れる此國家救済の腐敗汚氣の充満せる此社會を利導する一は唯々禪の影にたなひ腐敗没倫病信等に沈淪せる現宗門に隨順して國家社會に毒害を流しつゝあるも願する乎我等は此二者の中何れをかりし何れをたどれるものなるか自ら大に疑なき能はず宗門の一方面を見よ赫々たる麗はしき旭日の彩光は

方に東嶺に發輝せるに非ずや方に睡眠の覺破すべき時に非ずや日たかく中天に懸りて目もまばゆき頃起き出で、更に何をか爲さんとほする更に他方の一面を見よ、夜は益深け行きて金剛を懸ゆる修羅は殿堂の佛前に戰ひつゝあり、紫衣を裝飾せる有財饒鬼無財饒鬼は火焔を吐きて飢を呼ひ渴を叫びつゝあり、是れ皆聖祖の威光を忘却して魔軍に占領せられたる結果に非ずや世を救ひ人を導くべき機關釋尊聖祖の視しく授け給へる宗門をまのあたり魔に委して吾人如何で安閑として居らるべきや吾人新進の輩は方此問で處して斷然たる決心をささるべからず見よ聖祖門下を代表せる東都宗門大會は何を宣言し何を議決したるかを、よもや諸士は彼を知らず關せずといひ得、彼の宣言は我等願望にして彼の決議我宗の命脈に非ずや若し今にして疑懼し躊躇せば日蓮門下の語を如何すべきは我等懸點却來疑懼せば此身命を法共、誓つて此大事業に隨順せんと欲す然れども此業をなさんとするに猶幾多の素養を要す是れも本會が起る所以なり無幾くは本化門下の血あり涙ある青年諸師よ來りて此淨業を俱にせよ

明治三十五年六月 發起者 敬白

- 第一項 本化中央青年會規則
 本會は本化中央青年會と名く
- 第二項 本會は本部を京都川東本山頂妙寺に置く

- 第三項 組織
 本會は護法篤志の編素を以て成り會員を分て名譽會員贊助會員正會員の三とす
- 第四項 目的
 本會は聖祖の眞義を研究實踐するものとす
- 第五項 事業
 本會は事業として遺文研究會を設け其方法は講話及び討論の二とす
 講話は門下の領袖を聘して毎月二回の講話會を開き初回(第一の土曜日)は通俗的とし第二回(第二の土曜日)は聽講者會員に限る
- 第六項 役員
 本會は毎月一回の公開演説を開くべし
 本會は施本傳導に従事することあるべし
- 第七項 會費
 本會は幹事數名會計二名を置く
 本會は會費とし正會員より毎月金參錢を徵集し贊助員には補助を仰ぐべし



小林上人には先月下旬より北陸御巡教に相成然るに統一團よりは至急法話の原稿を送れど、事依て不取敢小生が日頃聽書させせるもの中より投書せり小生未だ黄塚の小難僧文字不熟にして上人の御意志のある處を寫し出す能はず若し意義をわやまれる如きあらば單に是れ小生の罪なり之を諒せよ

五眼勸信談

小林 老 上 人 說 教

松崎 事 成 編 書

今日は五眼と云ふ事より我々が成佛すべきありさまに就て少しお話し申す抑も五眼とは一には肉眼二には天眼三には慧眼四には法眼五には佛眼である地獄より人界に至る迄の眼を肉眼と云ふのでありませう其の肉眼と申すは餘り遠くても餘り近くても餘り亦高過ぎても底過ても見へないのでありませううして見ると

妙法蓮華經方便品 普公詠歌
 むのれとに心もたせられたる業に
 妙なるいろをそふるあき風

人間の眼も難有もない眼であります次に天人の眼を明さうなら之れは肉眼よりかは遙か勝れている第一遠近の差なく高底の別なくして夜でも見へるのであります云へば何んだか鼻の様だが鼻ではない鼻は夜見へて晝は見へないのでありすが之れは晝夜の差別なく夜でも晝でも同様に見へるのは即ち天眼の功能であります次に惠眼とは聲聞緣覺二乘の眼でありますが此の眼の功能は實に大した者で自分の観智を以て一切の萬物を観見せば何もかも丸で空に見へる山もなければ河もない石もなければ土もない遂には自分の體さへなくなる故に石の中でも土の中でも水の中でも何處へなりとも自由自在に達看する事の出来るのは惠眼の功能であります次に法眼とは菩薩眼である此の眼の功能は其の又空の中より萬物の具する事を見出して如何様のものにも欲する者を取り出す事が出来るのであります次に佛眼とは佛の御眼である此の眼の功能は過去は億々萬功不可議に至り未來は永劫の終りに至る迄即ち三世の事を一見して昨今の如く知る事を得るは流石佛眼の功能であります已上是れを五眼と申すのであります今またその因縁及び經相を明して見様然し人天の快樂は別に喜ぶべきでないからして肉眼と天眼とは暫くお預りとして於て慈には惠眼法眼佛眼に就てお話を致す事としやう聲聞緣覺の二乘は小乘に於て四諦と十二因縁とを修行して得たる功德が即惠眼で菩薩の權大乘に於て六度を修行して得た功德が即ち法眼で佛の實大乘によりて十界工具の法門を覺り一切衆生を見る事我か子を見るか如く一子思に住して得た功德が即ち佛眼である己上各々如是の因縁があつて小乘を修行しては法眼は得られない權大乘を修行しては佛眼は得られないのであります物にば大は小を兼上は下を兼るの道

り天眼を得ずれば無論肉眼の功能はあるのですから佛眼を得ば一切の眼は求めざるに備はつていたのであります然し今實大乘と謂は如何なる經であるか又如何なる法を修行したならば佛眼を得らるゝのであるかと云へば法華經である法華經の中にも本門本門の中にも殊に壽量品である今本門の事の一念三千の法門とは十界皆成佛道と説て山でも河でも石でも土でも衆生は勿論一切成佛せざるはなしと説てあるのが即ち壽量品の經相で一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛と見たのが即ち佛の眼であります速門に心に十界を具すると明す之れを理の三千と云ひ今本門は體にも十界の備はる事を明したるにて之を事の三千と云ふので如是壽量品は誠に結構なる經文であります只に是れ本迹二門に過る計りてない一切諸經の骨髓でありますから宗祖御遺書に曰く一切經の中に此の壽量品なかりせば天に日月なく山河に珠なく人に魂の無からんが如しと判じくだされてありますして見れば壽量品と云ふ經文は實に難有き經文ではあるまいか所が茲に一ツ殘念の事がある外ではない壽量品はかばかり難有き經文には相違なきも然し今末法我々衆生共の修行には到底堪られないであらう先づ一念三千の功德を得やうと謂ふにも其の通りで一切衆生に於て我が子の思ひをせなければ其の功德が得られないとすれば今末法に一人もそんな者はない故にこれは菩薩大德修行すべき經文で末法我々下根下機の修行すべき經文ではない云へば猶と小判どの如き者であるところ云ふ一ツ心配がある所か又宗祖の御妙判に據つて見まするに敢て心配するにも及ばない四信五品抄に惠又堪へずんは信を以て惠に替へよで信行さへあれば大丈夫である又本尊抄には一念三千を知らざる者には佛太慈悲を起して妙法五字の袋の中に

此の珠をこめ末代幻稚の首にかけしむとある又釋尊の因行果徳の二法は悉く妙法蓮華經の五字に具足す我等此の五字を尊持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り與へ玉ふなりとある及上野抄には幼子乳を與るに其の味を知らざれども自然に身を養ふとあります抑も信行とは譬は船の如き者である眞如の妙理實相の大海は廣く遠く我々凡夫の企て及ふ所でないどころしても船の力を貸なくては駄目であります舍利佛程の智者でも法華經に來りては非已智分と宣べ以信得人と説きてある况や我々凡夫の企て及ふ所でない云ふ事は云ふ迄もなにとでありましやう所か又不思議の事かある外ではない宗祖は此の妙法を信せば自然に因果の功徳を譲ると一分修行すれば一分佛になるとは殆ど音の聲に應ずるが如く月の水に寫れるが如く花と葉と同時なる蓮華の如くに功徳あるやう大うう難有いお言葉がありますが處で今我々は妙法を信しても別に變た所もない別に佛に成た個所もないそれで謗法者の地獄行の人とも別に違ひもないどころも之れは餘り受取りにくい話でないかどの不審が出生しやうが之れは今既に自分共は其都度得つゝあるのを知らないのであります譬は嫁女の始て懐妊せるか如し懐妊せる時に自分ながら其の懐妊を知らざるが如し今法華經の行者も又々かくの如し釋尊の大慈悲によりて妙法の種子を得たれども未だ日淺くして知るところを得ざるは嫁女の懐妊を知らざると同し事であります而し其の出産の時期はいつ頃であるかと云へば曰く臨終の際にあり臨終の一念を以て始めて無上道を獲得するのであります當家の法門は臨終の一念に有りとは此の事であります何卒諸君に於ても此の事を能く心得て中途にして流産なさざる様御心付けありて一度よりは二度三度南無妙法蓮華經をお唱へありて末頼母しく御信心の程を單に願ひ升南無妙法蓮華經

老がた

七拾四翁 津山信徒 林 日 法

私が本宗正義の信仰を決してより茲に三拾有余年を経過致しました、然るに昨年圓らすも病障の爲に手足が至つて不自由で一時は非常に困りましたが、それでいもありましやうか厭世の念がきざして色々な考まで起しました、私も若き時は商業に従事したものでありすが只今にては隱退の身にて唯日々佛事三昧のほかなす事もなく一應は氣樂なる身のやうなれど、寄る歳波と共に別に何とて一定の用ある身でもあらねば、我が思ひたちし事は之を行ふも別に社會の爲にも差支もあるまいと思ひまして、イツツの事用なき此身の日も早く臨終を望ましけれと斯く思ひつめたる心より、漸次に斷食してもと思ひましたが、娘多羅尾いどが申さずするには御閑暇なる身特に御病身の父上に取りてはげに去る心も待らんも、若し左様の事に御臨終ありては其深意を存せぬ人々は如何に評しやせん、又新聞などのうち草にさるゝ事あらんも口残さ限りなれば此事のみはさげて思ひ止り給ひねと申しますので、考へて見ますると一理ある言葉でもあり、のみならず信仰の上から考へてもうれば甚だ宜しからぬ事と悟りまして其事はフツゝりと思ひ止りて只其時を相待ちて益々信心にのみはげみて居りましたるに、其後病も全快致し氣も晴れゝとなりました、是れ單に妙法の是好良薬の大功徳を得ましたと申すものでありましやう、しかしながら人の命數は限りあるものなれば生ある内に何かな書き置きなん事もと思ひますれど元來深き學問の素養ある次第でもなく、只信仰一念よ

り得たるとなれば切れ〜なるとニッ三ッ書き記して置ます、是もまた老の心のなくさめ語り秋の燈下の友ともなりなば私の幸福でありす

一、吾々が本宗正義の信仰を決せば流轉の苦の免れると云ふ事の疑ひなきは日蓮聖人現實の御ありさまにて證し得らるゝ也、立正安國論、自界反逆、他國侵逼の兩難の御注告の事し事、尙は蒙古對治の御新曆の爲御願しありし大本尊の爲め、彼の兵船悉く底の藻屑となりしころ尊き事也、かゝるはどなれば釋尊の金言宗祖の保證し給ふ流轉の苦の免るゝ事火を見るより明也あなどうどさかな

一、私は斯の如くに迄思へり我々は此正法に値ひ奉るゝの嬉しさ、此大恩を報ひ奉るゝには未來永々義農の世となるまで幾度にてても此世に出で來り立ち歸りて不捨身命に折伏弘通を致したし、かくせば佛祖其他への恩を報ゆるに當るべきか、

一、思ふ云へば國の恩も大事也、我皇國は萬國第一の頭に立つべき國がら也、故は日蓮上人此國に出給ひ一閻浮提第一の大本尊を建て給ひ爲に天照太神、八幡大菩薩等の萬の神も倍増光ましましたるはいと目出度事にして我々の幸福甚しきもの此上なし、かゝる國へ生れては又此國の恩なからでやあるべき

一、今日は交通自在にして外國人もかゝる目出度大日本の地をふひとの出來るは是れ亦種縁也、世界は四海兄弟なり、一日も早く異体同心に爲さる可らず
一、私の最も感心せる御妙判

開目抄に我并に我弟子諸難ありども疑ふ心なくば自然に佛界にいたるべし天の加護なき事を疑はされ現世の安穩ならざるを歎かざれと我弟子に朝夕教へしかども疑を起して皆すてけんつたなき者のならひは約束せし事まことの時にわするゝなるべし妻子を不便と思ふゆへ現身にわかれん事をなげくらん多生贖却にしてしたしみし妻子には心どはなれしか佛道のためにはなれしかいつも同じわかれなるべし法華經の信心をやふらずして靈山にまゐりて還つてみちびけかし……………南無妙法華蓮經

一、かくの如き御厚き御教示であり升實に我等無始無終の靈魂は何時もながら五欲に着しいま迄はうろたへて生死致し來りしものにて重ね〜惡因のみつみたるとなるが、今回は是非〜善因を致し苦海を免れ立派なる成佛得道こそ肝要なれ、あなかしこ

(明治三十五年七月廿五日記む)

圓報の改良を願して、

いとうれし蓮華のかけに啼く紙
菊の香に光臨ゆるや後の月
我も人も云ひ合されど菊の花

廣部永眞
はなふさ

改革よ就て

本誌は本號より統一と改題したり其内容に至つては未だ豫期の如くなる能はざるを謝せんばあらず猶この上とも同志諸士と共に初一念を貫徹せんことに強めて止まざるべし

本誌代金

は從來一部五錢の處本號より金八錢に改む(但し郵税共)

◎同信會諸君へ

本會は以來本誌を以て諸種の報告等致すべきに付會員諸君は必ず本誌を購讀可相成且つ他へも可及的購讀御勸誘相成度候也

東京淺草區吉野町

僧俗同信會

主筆松筆友北

定價 一月一回(十五日)發行

半年 六部金卅錢
一年 十二部金六十錢
爲替は函館惠比須町局振
込郵券代用一割増

發行所 函館市相生町

北友雜誌社

主管佐野貫孝

日本之柱

毎月一回(十五日)發行
定價一冊金五錢一ヶ年前金
五十錢爲替は大坂高津局振
込郵券代用は五割増

發行所

大坂市東區西高津
中寺町五一六番

立正社

主筆武田宣明

教友雜誌

毎月二回(十日廿五日)發行
定價一部(郵税共)前金五錢
一ヶ年前前金壹圓貳十錢

發行所

甲府市
稻門村

教友社

▲廣告▼

本誌改題と共に統一團にて發行す

主筆加藤文雅

日宗新報

毎月三回發行

▲定價一部金五錢十八冊(半年分)前金八十五錢卅六冊(壹ヶ年分)前金壹圓六十五錢
▲送金は池上郵便受取所へ振込み(日宗新報主任加藤文雅)と御指定の事

主筆田中智學居士

妙宗

發行所

相模鎌倉
要山

師子王文庫

▲毎月一回(六日)發行
▲每號大附録附
▲定價一部金十錢(附録共)
▲郵税金一錢壹ヶ年前金壹圓貳拾錢(不要郵税)
▲送金は師子王文庫宛鎌倉局振込の事

千葉縣及各地暴風御見舞

東京 僧俗同信會

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊八錢十二冊前金八十六錢廿四冊前金一圓七十錢郵券代用は一割増但五厘切手
一購讀申込の節は住所姓名を附書にて認むべし
一爲替は武藏國品川郵便局へ向け御振り込の事
一本冊は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡済通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五錢活字廿四字誌每一行金七錢なり

明治卅五年十月十五日印刷發行

發行所 井村 尚也
編輯人 山根 顯道
印刷人 鈴木 障學

發行所

東京府在原郡品川町元南品川四百十二番地

統一團

統一

前八十九號 要目

- 一本誌改革報告……………本多日モ
- 一讀法論……………本多日モ
- 一都鄙風俗の比較と宗教……………影山謙二
- 一伊豆伊東講堂會日記……………坂大高
- 一主師親三總の大導師……………南山道人
- 一統計學上自殺を論じて全佛一門に告ぐ……………窪田貞二
- 千葉經道教日誌……………窪田貞二

次號掲載 要目

- 一日蓮上人冷評(續)……………松尾忍水
- 一大音聲……………窪田基松
- 一各面評論一東……………清瀬華城
- 一佛敎上の評……………石渡江東
- 一予の所謂宗教文學を鼓吹する以所(續)……………松尾忍水
- 一奉時策議……………廣部永真
- 一未定……………山根青村
- 一歌教……………小林日生

○本號 要目

日蓮門下統一問題に於ける疑問の解釋……………清瀬真蓮
 予の所謂宗教文學を鼓吹する所以……………松尾忍水

日蓮上人の冷評(續)

松尾忍水に與ふるの書……………松尾忍水

大音聲

奈岐山下妙法の華……………窪田基松

僧侶と教義……………窪田基松

檀家の責任……………窪田基松

笑話一策……………窪田基松

すつばぬ記……………窪田基松

佛敎の實義……………窪田基松

講習會日記……………窪田基松

七里法華改革談……………窪田基松

純情園來……………窪田基松

雜誌布教に就て……………窪田基松

人生の幸福……………山根顯道

漢詩 韻文 和歌 俳句等……………山根顯道

(明治三十年二月廿四日第三號起發行) 每月一週十五日發行